

第1部

学園の80年

第1部 学園の80年

第1章	【昭和14年～昭和22年】瑞穂高等女学校、開学へ	2
第2章	【昭和23年～昭和34年】新制高校への変革、瑞穂短期大学開学	11
第3章	【昭和35年～昭和56年】学園の充実発展と近代的施設の完成	21
第4章	【昭和57年～平成4年】創立50周年、新たな時代へ	33
第5章	【平成5年～平成11年】愛知みずほ大学の開学と短期大学の変革	37
第6章	【平成12年～平成24年】新世紀へ、男女共学化と大学院の設置	45
第7章	【平成25年～令和元年】名古屋キャンパスに集結、新生みずほの誕生	55



開校当時、セーラー服の女学生たち



第1章 瑞穂高等女学校、開校へ

昭和15(1940)年4月 科学的な女子教育を目指す 瑞穂高等女学校が開校

瑞穂高校の歴史は、名古屋市内で眼科医院を開業していた医師一家の夢から始まる。日本全体の平均寿命が50歳に満たなかった時代、瀬木本雄は留学先のドイツで先進的な医療・生活環境に接し、母国の女子教育の後れを感じた。妻のせきは夫の留学中、息子たちを育てながら独学により医術開業試験に合格、女性の自覚と地位向上を目指す啓発活動にも参加していた。瀬木夫妻は、正しい保健衛生知識と科学的なもの^{もとたつ}の見方を教える新しい高等女学校の設立を計画、長男の本立医学博士が加わり、具体化されていった。

昭和14(1939)年12月、私財を投じて瀬木財団法人を設立。翌年4月、瑞穂高等女学校が開校、瀬木本立が初代校長に就任した。しかし、程なく太平洋戦争が起り、昭和20年5月の名古屋大空襲によって校舎は全焼した。

昭和14(1939)年



昭和22(1947)年

医学博士たちが抱いた 学校創立への強い意志

瀬木本雄とせき

瑞穂高等女学校（現・愛知みずほ大学瑞穂高等学校）創設の中心となったのは瀬木本雄・せき夫妻および長男の奉壺である。この医師一家によって創立された瑞穂高女は、科学的な思考ができる女性の養成を目的としていたこともあり、後に新聞では「ドクトル（ドクター）学園」と評された。名古屋市内で医院を経営する瀬木一家が、なぜ私財を投じて学園の創立に尽力したのか。それは当時の世相や生活環境と深く関わっていた。

瀬木本雄は、明治30（1897）年に愛知医専（名大医学部の前身）を卒業した後、ドイツのミュンヘン大学へ留学。大正2（1913）年には名古屋初の眼科専門医院として瀬木眼科病院を中区の大須に開院した。「大須の瀬木眼科」と呼ばれ多くの人に親しまれるなか、本雄は診療と研究を続け、大正11年には医学博士号を授与された。

注目すべきは、妻であるせきの経歴だ。妻のせきは名古屋高等女学校（現・菊里高校）の第1回卒業生である。

高等女学校へ進む女子が5% 未満だった明治時代半ばにあって、せきは先端を行く女性だったといえよう。せきは国語漢文科の教員免許を取得し、卒業後は教師となった。そのころの女性は結婚後には家庭に入るのが当然とされていたが、せきは本雄と結婚した後も仕事をやめなかった。それどころか夫の留学中には幼い息子たちを育てながら独学で医学を学び、難関として知られた医術開業試験に合格するという快挙を成し遂げたのである。時代が昭和に移ってからも、せきは本雄とともに眼科医として働きながら、大日本婦人会（政府組織の婦人報告団体）理事として女性の社会的地位向上に力を尽くし、市川房枝らの婦人参政権運動にも参加している。

女子教育に科学思想を

先進的なドイツの生活を体験した本雄と、女性の自立に貢献したせき。ともに専門の医学知識と社会に対する広い視野を持つ夫妻は、次第に日本の生活環境に対して問題意識を持つようになっていった。

いまでこそ長寿国となった日本だが、明治から昭和にかけての衛生状態は決して良くはなかった。乳幼児の死亡率が高いうえに結核などの感染症患者も多く、戦前の



初代理事長 瀬木本雄



理事 瀬木せき



日本では平均寿命は男女ともに40歳台。50歳を超えたのは昭和22（1947）年のことである。瀬木眼科病院でも多くのトラコーマ（伝染性結膜炎）患者が訪れたように、戦前は病原菌の感染を防ぐための知識や手段が普及しておらず、肺炎や結核などの感染症が最大の死亡原因であった。

自分たち医師の努力だけではこの状況は変えられない。生活環境を改善するには、家庭を守る母親自身が正しい保健衛生知識を持ち、科学的かつ論理的な考え方をしなければならない。そう瀬木夫妻は考えた。しかし当時の女子にとって実質的な最終教育機関だった高等女学校は、良妻賢母を育成する場とされており、カリキュラムは基本的な教養と家事技能の習熟に重きが置かれていた。そこで瀬木夫妻は、科学思想を取り入れた理想とする高等女学校を自分たちの手で作り、日本の科学発展への基礎にしたいと考えたのである。そんな両親の思いに、長男の本立も同じ思いを抱くようになった。本立は東大卒業後、父親と同様にヨーロッパ留学を経験した医学博士で、昭和11年からは瀬木眼科病院の副院長に就任していた。

こうして瀬木一家は病院経営で得た収益をつぎ込み、

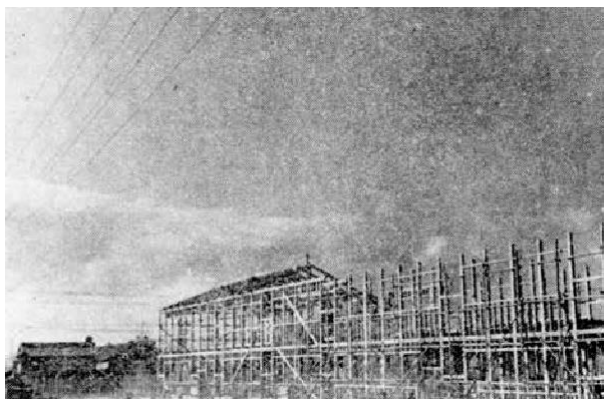
新たな学校設立へと走り出した。本雄らは診療のかたわら学校設立に向けて、膨大かつ煩雑な書類をそろえて関係省庁を回った。最終的な認可申請は昭和14年7月で、このとき本雄は64歳、せき^{みつお}56歳、本立36歳。後に瀬木学園理事長となった次男の三雄は「ドクトル一家から自然に生まれた学校創立でした」と語っている。

新しい女子教育の場

「瑞穂高等女学校」

開校まで4カ月間・準備は急ピッチで進む。

瑞穂高等女学校の正式な認可が下りたのは、申請から半年後の昭和14（1939）年12月6日である。後にこの日は創立記念日と定められた。理事長には瀬木本雄、初代校長には本立が就任した。理事には、せき^{としお}をはじめ次男の三雄、三男の紀男、本立夫人の房子^{もりたつ}、三雄夫人の芳江、本雄の弟である水谷盛立が名を連ねている。ここから具体的な校舎建築や生徒募集が始まるのだが、開校予定は翌年4月と、わずか4カ月後に迫っていたため、校舎建設から備品手配、教員確保、学則づくりな



第1期新築着工



初代校長 瀬木本立



校舎



門柱

どすべてがスピーディーに進められた。

まず学校用地には、本雄の所有地だった瑞穂区牛巻の田畑を充てることが決まった。名古屋市南部には高等女学校が少なかったこと、名古屋市電の牛巻停留所近くで南側には約24m幅の道路（現・山手グリーンロード）が整備される計画となっており、バス・市電の両方が通学に使える便利さが理由となった。本雄らは瀬木財団法人の設立登記を行って敷地を法人名義へ移し、早速校舎第1期工事に着手、3月には準備が整った。新築の校舎は、モダンな赤い屋根の木造2階建てで、採光や通風、保温、衛生にも配慮した理想的な建物だった。

設立の趣旨と指導目標は次のように定められた。

設立の趣旨

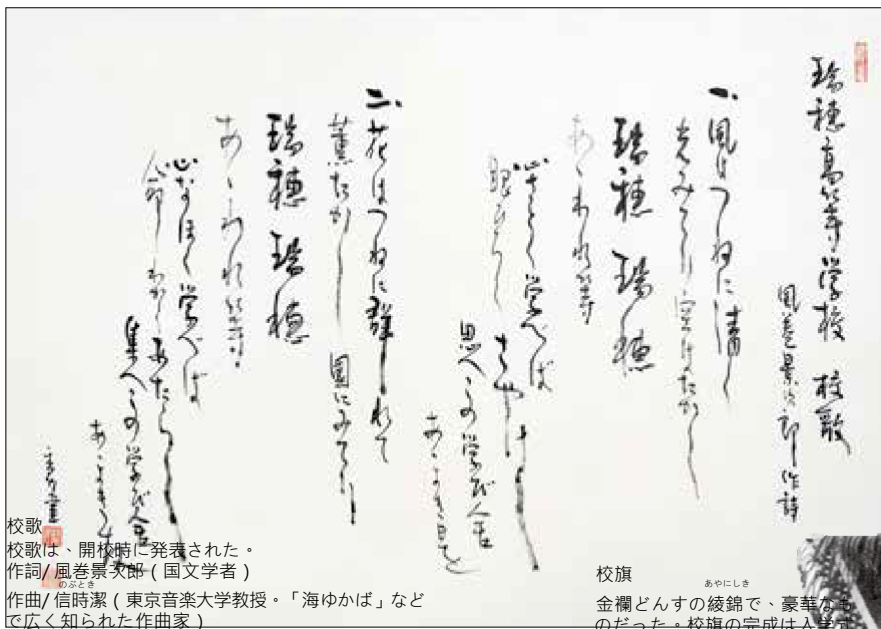
開校の昭和15（1940）年は日中戦争の4年目、太平洋戦争開始の前年である。大政翼賛会が発足して、戦意高揚が叫ばれた年であった。そのような時代であったため、設立の趣旨は「紀元二千六百年の光輝に浴し」と始まるが、文末では「女子教育一般の内容の充実を期し、科学方面に深く意を注ぎ生活原理としての理科教育を十分に習得せしめ、真に役立つ保健衛生の学術指導とあ

いまって、本校としての特色を十分に発揮して他に抜きんじ（中略）日々の生活に、本当に生きがいのある情操豊かな良き娘、良き妻、良き母たるべき新女子教育達成に献身を誓う次第であります」と結ばれている。そこにはなんとしてでも科学的なものの見方や考え方、保健衛生的な知識を身につけさせたいという願いが込められている。

指導目標

1. 他の公立学校に対して一步も負けない学力をつけること
2. 勉強は健康を害しやすいため、病気のときは遠慮なく学校を休むこと
3. 時局の認識に関する教育を十分にすること
4. 学術・徳育・体育・学校行事等を総合して人物を作ること
5. 集団勤労奉仕は特に健康に注意して行うこと 特
に2と5には、医師としての配慮がうかがえる。

入学資格者は、小学校（昭和16年度からは国民学校と改称）6年を卒業した者。修業年限は5年（昭和18年度より戦局拡大とともに4年制へ変更）であった。入学金は2円、授業料は月5円。他の私立高等女学校と同等の設定で、月4円40銭の授業料だった県立高校ともさほど違いはなかった。公務員の初任給が75円だった時代で



第1章 瑞穂高等女学校、開校へ

ある。

第1学年150名として生徒を募集、第1回入学試験は昭和15(1940)年3月22日、23日に行われた。この年から全国的に学科試験が全廃となったため、瑞穂高女でも口頭試問による人物考査、身体検査の総合判定による選考となった。当時の女学生たちの間では「お医者さまのつくった学校」「上級生のいない学校」として期待を集め、応募者数は予定を大きく超えた。150人の定員に対し、第1期生は183人が入学、2割以上の増員であった。

瑞穂高等女学校開校と深まる軍事色

昭和15(1940)年4月6日、瑞穂高等女学校の第1回入学式が行われた。翌週からホームルームや熱田神宮の参拝、身体検査などが行われ、友情と協力によって徳を養い体を鍛えていく修養機関として校友会が発足した。183名の第1期生たちは3クラスに分かれて授業を受けた。同時に瀬木本立校長が先頭に立ち、服装や礼儀、姿勢、歩き方など日常生活全般にわたる厳しいしつけ教育が行われた。本立は自らのドイツ留学の経験から、女学生たちに対して将来海外へ出て恥ずかしくない教養

とマナーを身につけさせようとした。程なく瑞穂高女の女学生はその礼儀正しさが評判となった。

瑞穂高女の最大の特色は「課外の講話」にあった。これこそが科学的な思考法や保健衛生に関する知識を養うために行われた独自プログラムである。初年度だけでも保健衛生の講話が13回実施され、科学や時局に関する講話を合わせると年間21回に及んだ。講師は瀬木家の医師が務める場合が多く、第1回はせきによる「天然痘の話」だった。また7月には三重県須賀浦海岸で海浜学校も開催された。これも少女たちに幅広い経験の場を提供し、健全な発育を支援したいという瀬木家の思いから生まれた行事である。

しかし世相は軍事色に染め上げられ、「ぜいたくは敵だ」がスローガンとして叫ばれるようになっていた。生徒・学生にも勤労作業が課せられ、瑞穂高女の女学生は初年度から夏季休暇中に農作業などに駆り出された。開校2年目の昭和16年6月には、食糧事情の悪化のため勤労作業による学校農園が完成。さらに7月には特別編成の時間割となり、授業のほかに作業・団体訓練が行われた。また従来の校友会が廃止され、9月には学校報国団が結成された。これは学徒の修練を重視し、集団勤労と訓



第1回入試



海浜学校

練を行うことを目的とした組織である。厳しい指導のもと、女学生たちも街頭歩行訓練や行軍に取り組むこととなった。そして同年12月、ついに太平洋戦争が始まったのである。

校舎全焼、終戦を迎える

通年勤労働員実施、学校も工場化

昭和18(1943)年1月、学制改革の勅令「中等学校令」が公布され、4月から学制が大改革された。瑞穂高等女学校の教育内容も大きく変わるようになった。教科および修練の課程と授業時間数はすべて文部省(元・文部科学省)が定めたものとなり、本校独自のものではなくなった。さらに、食糧増産の勤労働員に出動することになり、昭和19年4月には通年勤労働員が実施されて授業は停止、女学生たちは農場や工場へ向かった。工場動員の一方、昭和19年5月には学校を工場化することが決まり、愛知県では6月から学校工場化が始まった。瀬木本立校長は、動員先の工場の衛生環境が悪かったため他校に先駆けて本校の工場化を実施。県内の製造工場の一部



制服

紺色のセーラー服・襟に白のカバー付き。戦争の激化とともに昭和18(1943)年にはヘチマ襟・前ボタン止めの活動的な上着に改められた。写真は昭和18年の登下校時の服装で、自分たちで作ったズボン(もんぺ式)で胸に名札がつけられている。髪型も必ずしぼらなければならなかった。手には何も持たず背のう(ランドセル式)だった。

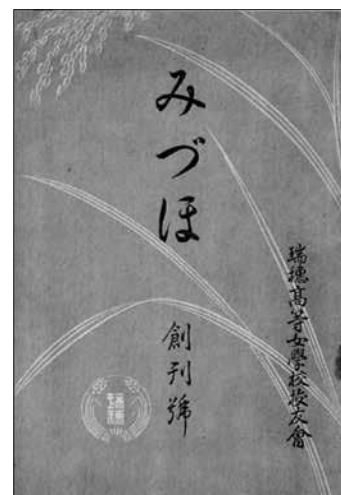
が移転し、女学生たちは軍用機の翼の部品研磨作業に従事した。

昭和15年4月に入学した瑞穂高女の第1期生は昭和20年3月卒業、さらに16年4月入学の第2期生は修業年限を1年短縮されて、第1期生と同じく昭和20年3月に卒業となった。しかし、文部省の「新規中等学校卒業生ノ勤労働員継続ニ関スル措置要綱」に基づく県の通告によって、卒業生は専攻科生としてそのまま勤労働員を続けた。

空襲により校舎全焼

昭和19(1944)年末よりアメリカの本土空襲は日を追って激しくなり、名古屋にも昭和19年12月より本格的な空襲が行われた。東区の三菱重工業名古屋発動機製作所や港区の三菱重工業名古屋航空機製作所が標的とされた。とりわけ航空機生産の最大拠点である三菱重工業名古屋発動機製作所は、アメリカ軍の日本本土空襲の第一目標であり、繰り返し目標爆撃の対象となった。翌年3月には市街地への無差別爆撃が始まり、深夜の空襲が多くなった。

同年3月10日東京、12日名古屋、14日大阪、17日に



瑞穂高等女学校校友会「みづほ」創刊号

しょうい

は神戸と一週間に大規模焼夷弾攻撃が敢行された。3月19日午前2時ごろには再度名古屋市市街地への大規模空襲が行われ、14万2,887人が被災し、死者826人、負傷者2,728人に上った。5月14日には最多の472機が来襲、焼夷弾2,515トンを下し名古屋城が炎上した。そして、5月17日午前0時30分、457機が来襲し焼夷弾3,609トンを南部市街地に投下した。これにより瑞穂高女の校舎は全焼した。焼け落ちる校舎の火の粉を浴び、当直の教員と駆け付けた生徒が校歌を歌いながら見送ったという。熱田神宮もこのとき焼失している。名古屋市には実に63回の空襲が行われ、B29の来襲は2,579機に達した。投下された爆弾の総量は1万4,000トンに上り、被害は死者7,858人、負傷者1万3,788人、被災家屋13万5,416戸に及び、名古屋市は日本の他の大都市と同様に壊滅的に破壊された。本校の女学生たちは、動員先の工場も学校も焼失し、食糧事情が窮迫するなか、厳しい生活難と闘うことになった。瀬木一家の夢も開校からわずか5年で灰燼に帰したかに見えた。

終戦、広路国民学校で授業再開

戦局は一層緊迫し、昭和20（1945）年7月26日、アメ

リカ・イギリス・中国はポツダム宣言を発表し日本の降伏を勧告した。8月6日、9日と広島、長崎に続けて原子爆弾が落とされるに及んで、8月15日、日本はポツダム宣言を受諾。太平洋戦争は日本の敗戦に終わった。

名古屋市民は焦土のなかに終戦を迎えた。空襲で焼失した学校は、焼け残った他校の一部を借りて授業を行うことを余儀なくされた。瑞穂高女は、昭和区の広路国民学校（現・名古屋市立広路小学校）の2階に間借りすることになった。各学年1教室の午前午後交代の二部授業が行われ、小学生用の二人掛けの机腰掛けに三人が座らなければならなかった。

専攻科生として卒業後も引き続き勤労動員に従事していた瑞穂高女の第1期生・2期生は、次々と学校を辞めていった。他校の多くは終戦を契機に専攻科を廃止していた。瑞穂高女専攻科には280人以上在籍していたが、昭和20年9月に修了した者は40人、翌年3月の修了者は55人にすぎなかった。

愛知県では戦後初の修学旅行

太平洋戦争に敗れ、連合国軍が日本を占領した。占領開始とともに連合国軍総司令部（GHQ）は、民主化政



勤労報国隊の腕章をして



勤労動員で工場へ通う生徒たち



同居当時の木造の広路国民学校

策を実施した。教育の面では、軍国主義的教育の禁止、軍国主義者の教職からの追放、国家神道や神社神道の公的機関からの排除、修身・日本歴史・地理の授業停止とそれらの教科書の回収であった。戦時教材は省略削除され、生徒の手元に残っていた教科書は墨で塗られた。また、学校報国団は解体され、自治的な校友会に再編成された。

敗戦というかつて経験したことのない事態のなかで、国民はその日その日の食糧を求めて、過酷な生活にあえていたが、一方では、当時国家理念として主張された「文化国家の建設」という希望を抱いていた。昭和21(1946)年10月、京都・奈良への修学旅行が再開され、昭和22年には東京・日光へと足を伸ばした。「百聞は一見に如かず」という言葉を好んで口にしていた瀬木本立校長の考えによるものであり、愛知県下では戦後最初の修学旅行であった。宿での食事用の米を持参しての旅行ではあったが、戦争が終わった明るさに満ちていた。

校舎再建

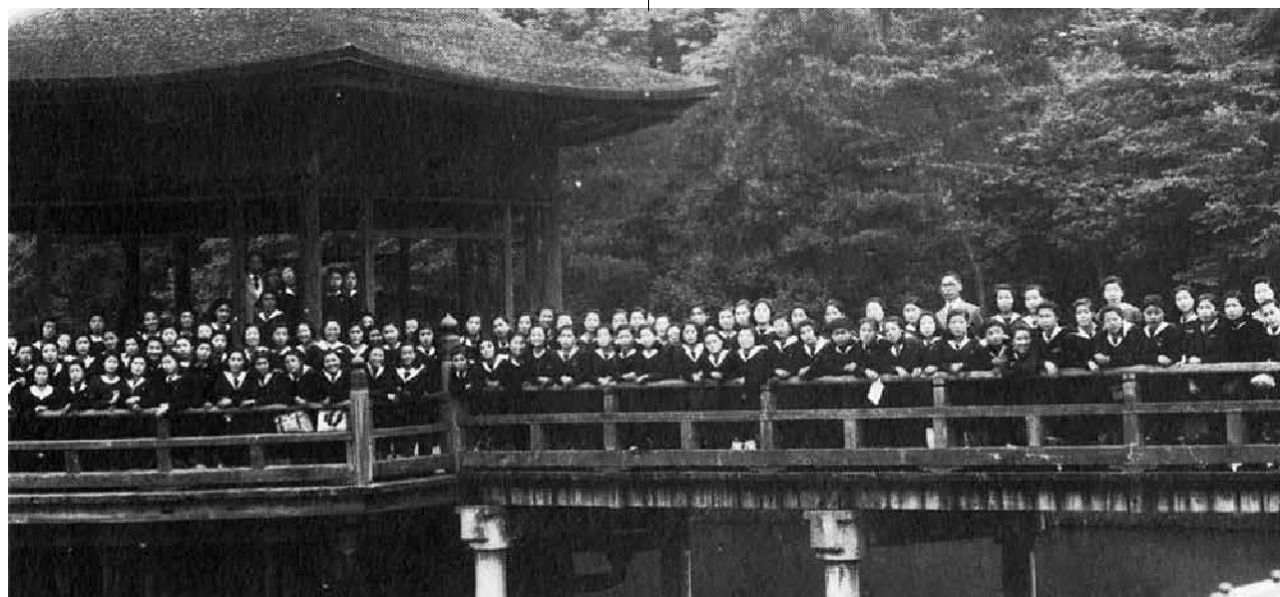
校舎再建の願いは強かったが、敗戦後の厳しい状況のなかで学校の再建は創建以上に困難を極めることと

なった。瀬木家の私財を再び投じるようになったが、大須の瀬木眼科病院が空襲で焼失したため、その再建も必要であった。昭和区滝子町に新しく病院を建て、瀬木本雄、せき、本立らが診療を続けたが、その収入の大半は学校経営に充てられた。

極端な資材不足のなか、学園関係者の奔走により、昭和21(1946)年から校舎建築に着手した。昭和22年度の卒業式は名古屋市中区西川端町の中日会館(中日新聞の別館)で挙行されたが、同年3月31日、瑞穂区春敲町に木造瓦葺きの平屋で3棟15教室の新校舎が完成し、広路小学校(昭和22年4月1日改称)より移転した。樹木一つない焼け跡に建てられ、「ウナギの寝床」といわれるような細長い校舎であったが、戦後の混乱期のなか、他の多くの学校に比してかなり早い再建であった。この年、12月6日の創立記念日を中心として復興祭が盛大に開催された。

同窓会の創立

同窓会の活動は早く、終戦直後に開始された。瑞穂高女第1期生で初代の同窓会会長も務めた三品嘉子は、『創立五十周年記念誌』で次のように記している。



奈良への修学旅行

「戦災によって校舎は焼失し、貴重な資料や記録誌などすべて灰になってしまいました。その焼け落ちる校舎の火の粉を浴びながら私は泣きました。大好きな黒のグランドピアノも燃えました。(中略) みんなで校歌を歌いながら見送りました。その時私は発奮しました。みんな失くしてしまったから何かを残そう。後輩のためにより良い伝統を残すには、まず同窓会を設け、その礎になろうと……。終戦直後の困難な時節でしたが、私たちは若かったので苦勞ではなかったようでした。焼跡や疎開先の友の消息をたずね回り手作りの名簿をたよりに、第1回の同窓会を開いたのもつい先日のように思い出されます。」昭和20(1945)年9月には、瀬木本立校長の指導も得て同窓会を設立する運びとなり、発会式を行った。同年3月の瑞穂高等女学校の第1期卒業生・第2期卒業生、9月の専攻科第1期修了生を会員として発足。発会式には27人が出席し、瑞穂会と名付けられ、第1期生の三品嘉子が初代瑞穂会会長に就任した。昭和21年3月27日には、第3期生を新入会員として迎えるとともに、名古屋タイムズ社ホール(中日会館)において第1回総会を開催した。



瑞穂会発会式(昭和20年)



理科の授業風景

2

昭和23(1948)年



昭和34(1959)年

第2章 新制高校への変革、瑞穂短期大学開学

学制改革を受けて瑞穂高等学校発足、 瑞穂短期大学開学

昭和23(1948)年、戦後の学制改革により中等教育が一元化され、瑞穂高等女学校は瑞穂高等学校(普通科)として改めて発足した。瀬木本立が校長に就任。建学の精神は新制高校にも引き継がれ、理科教育と保健衛生を重視する教育を行った。北海道への修学旅行を行うなど先駆的な教育活動を展開、昭和25年4月、瑞穂短期大学(家政学科)を創設して女子の高等教育への道を開いた。また、高校は昭和30年4月、家庭科1クラスを設置した。校舎の増築にも取り掛かり、講堂を含む校舎や図書館を新築。鉄筋コンクリート造り3階建て校舎と4階建ての近代的な校舎が相次いで竣工した。

一方、私立学校法の施行に伴い、瀬木財団法人は昭和26年2月、学校法人瀬木学園として認可を受けた。初代理事長には創立者である瀬木本雄が就任したが、昭和32年9月に逝去、瀬木本立が第2代理事長に就任した。

瑞穂高等学校（普通科）開校

瑞穂中学校設立と瑞穂高等学校開校

昭和22（1947）年4月1日、教育基本法・学校教育法が施行され、国民学校令・中等学校令等は廃止された。修業年限については、小学校6年、中学校3年、高等学校3年（ただし定時制・通信制は3年以上）、大学4年とそれぞれ定められた。この六三三制により前期中等教育までが義務教育として、すべての国民に義務づけられた。愛知県下では、公立286校、私立33校の新制中学校が誕生、4月18日、瑞穂中学校も含めて一斉に開校した。

瑞穂中学校の設置認可は昭和22年4月1日。5クラスを設置、昭和20年4月に入学した高等女学校1年生206人が新制中学校3年生となり、昭和23年3月に卒業する新制中学校最初の卒業生となった。

新制高等学校は新制中学校の教育の上に進むことのできる唯一の学校として構想され、中等教育が一元化された。昭和23年4月1日、新制高等学校発足と同時に、瀬木学園は瑞穂高等女学校を発展させ瑞穂高等学校が

開校した。瀬木本立が瑞穂中学校・高等学校の校長に就任した。

瑞穂高等学校は、普通科のみの2クラスでスタートした。クラスはA組・B組と呼称した。中学校最初の卒業生206人のうち半数程度が高校1年生となり、昭和26年3月、94人が新制高校を卒業した。学制改革とともにこの年県内で誕生した新制高等学校は、県立55校、市町村立29校、私立33校に上った。

熱田女子商業学校合併

昭和23（1948）年4月には実業学校（各種産業に従事するための教育を施す学校）が廃止され、本校の隣にあった熱田女子商業学校が消滅。最後となる昭和21年に熱田女子商業学校に入学した79人は母校を失うことになった。本学園は、その79人を瑞穂中学校3年生として受け入れ、同校の教員4人も瑞穂中学・瑞穂高校で教壇に立つことになった。

新制度による新教育が発足したとはいっても、教科書や用紙の入手も困難な状況で、教科書も薄く粗末なものであった。しかし、昭和22年に新築されたばかりの木の香の漂う校舎で、生徒たちは勉学に励むことになっ



完成した新校舎

た。社会科の新設をはじめとして理科教育の重要性が叫ばれ、現代仮名遣いも定められるなど、新教育の第一歩が踏み出されたのである。

新校舎・図書館の竣工

新制高等学校として発足するとともに校舎の整備に取り組んだ。昭和23（1948）年6月、木造瓦葺き2階建ての校舎が新築された。1階は普通教室とし2階は講堂とした。次いで、昭和25年3月には、木造2階建ての図書館（120坪）が新築された。白と緑からなるモダンな建物であった。この図書館は演劇活動などのレクリエーションにも利用された。

瑞穂高女最後の卒業式・瑞穂高校第1回卒業式

六三三制の学制改革が行われる直前の昭和21（1946）年2月22日、中等学校令改正により、中等学校は同年に卒業する者から修業年限が5年に延長された。卒業直前の決定であり、生活難などから5年生に進級することなく4年生で卒業していく生徒も多かった。その結果、17年4月に入学した同級生は、瑞穂高女第3回卒業生（52人）と第4回卒業生（85人）に分かれることになった。



上から見た新校舎



新校舎

昭和24年3月10日、瑞穂高女最後の卒業式とあわせて瑞穂高校第1回卒業式が挙行された。瑞穂高女最後の卒業生となったのは昭和19年4月に入学した第5期生のうち5年生に進んだ136人である。また、昭和18年4月に瑞穂高女に入学した第4期生のうち20人が瑞穂高校に入学（3年生）、新制高校第1回の卒業生となった。昭和19年4月の入学生のうち一部（38人）はさらに高等学校の3年生に進み、第2回卒業生となった。

創立10周年

昭和24（1949）年11月、前年に新築された講堂において創立10周年記念式典が挙行された。

瑞穂短期大学開学

瑞穂短期大学家政科を設置

昭和25（1950）年4月、瑞穂短期大学（家政科）を創設して女子の高等教育への道を開いた。短期大学は、同年4月1日、学校教育法の一部改正により、暫定的制度として発足した。このとき創設された学校数は公立17



瑞穂高等学校の校旗



創立10周年記念式典

校、私立132校の149校。愛知県内では13校であった。瑞穂短期大学は、短期大学第1号として開学したのである。瀬木本立高等学校長が短期大学学長兼教授に就任した。設置学科は家政科であるが、自然科学分野の系統につながる短期大学として「保健衛生の学びを基に科学的思考のできる女性の育成」を建学の精神とし、「健への教育」をモットーとして掲げた。

昭和20年から35年前後の時期の四年制大学・短期大学への進学率は10%前後、四年制大学のみ進学率は8%前後にとどまっており、この段階の高等教育は戦前と同様、一部の者が受けるにとどまっていた。そのような状況下で、瑞穂短期大学は日本最初の短期大学として開学した。当時の本学園は、4棟の校舎があるだけで、短期大学はその中の2階建ての校舎を本拠として出発した。

短期大学の多くは旧制の専門学校を母体としていたが、高等女学校を母体とする瑞穂短期大学の前途は必ずしも洋々としたものではなかった。開学当初の定員は家政科40人であったが、第1回の入学生はわずか3人にすぎなかった。しかし、医学博士瀬木本立学長はじめ恵まれた教授陣のもとで優れた教育が展開された。当時

の新聞には「地方色豊かな、近代的科学を基調として教育方針をもつ学校として異彩を放つであろうことは疑いない」と紹介されており、世間の耳目を集め、開学に期待を寄せられていたことがうかがえる。

学校法人瀬木学園認可

昭和26（1951）年2月には、私立学校法の施行（昭和24年12月15日制定）に伴い、法人組織を財団法人から学校法人に変更、学校法人瀬木学園として認可を受けた。理事長には瀬木本雄が就任した。

栄養士養成施設に指定

瑞穂短期大学創設期の学生の確保は容易ではなかったが、徐々にその数を増やしていった。昭和29（1954）年11月には、中学校教諭（家庭科）免許状授与課程の認可を受けた。さらに昭和31年4月1日、「大学栄養士養成施設」として厚生省（現・厚生労働省）から認定された。定められた単位を修得すれば、栄養士の資格を与えられることになったのである。教員免許状と栄養士免許状の2つの資格が得られることは本学の大きな魅力となり、県内外から希望者が多く集まることとなった。



理事長 瀬木本雄



短期大学の調理実習風景

新制瑞穂高等学校の教育

理科教育と保健衛生を重視

当時の瑞穂高等学校の入学案内書には「女子の学園」を大きくうたい、教育課程においても家庭職業教科（計算実務を含む）に22単位を充てていた。特別教育活動として、ホームルームと並んで茶道・華道に重点を置いていた。その他の特徴は、理科に国語と同じ12単位を充てていることである。理科教育の目標としては、「科学的諸概念の知識と理解・問題解決法と用いる能力・批判的な思考をなし得る能力・創造的態度、実際場面への応用の態度と習慣」を掲げた。授業内容は家庭的要素が強く、特に保健衛生と料理・被服に力を入れていた。調理室にはアメリカ式のキッチンが取り入れられた。また、保健衛生の時間は専門化しており、保健衛生室にはベッド2台を備え、モデル病室まであった。医師である瀬木本立校長ばかりでなく病気に応じた専門医を招き、生徒たちに実際の衛生知識を与えた。生活原理としての理科教育を十分に習得させ、科学的なものの見方や考え方、保健衛生的な知識を身につけさせたいという瑞穂

高女設立時の願いは新制高校にも引き継がれた。

昭和25（1950）年に瑞穂短期大学が創設されてからは、短大との連携によりさらに十分な講師陣と設備のもとで教育が行われるようになった。

4 教室増築、玄関も新築

昭和28（1953）年、木造瓦葺きの2階建ての校舎が増築され、4教室が造られた。このとき、玄関も新しく造られた。玄関はピンク色のタイル張りで、華やかながらも上品な女子高らしい雰囲気を醸し出すものとなった。

制服の改定

制服は昭和15（1940）年の開校時からセーラー服であったが、昭和24年4月入学の1年生からデザインが改定された。新制高校の発足とともに気分一新を図ったものである。セーラー服は、もともとイギリス海軍の制服であったが、新制中学校・高等学校の多くが女子生徒の制服として採用、定着していった。しかし、新デザインのセーラー服期間はわずか5年にすぎなかった。

昭和28年5月、新1年生からプレザースタイルの制服に改定された。新しい制服は、白のブラウスに紺のジャ



高校の授業風景

ンパースカート、紺のブレザーの組み合わせによるもので、ブラウスは長袖と半袖の2種類、6月から9月までは半袖ブラウスにスカート着用、5月と10月ごろは長袖ブラウスにスカート着用とした。高校生らしい、スマートで上品な制服と評判であった。

当時の日本は、昭和26年9月8日に、サンフランシスコ講和条約調印、翌年4月28日、条約発効により日本の主権が回復し、国民はようやく戦後の虚脱状態から脱出することができた。また、教育現場では民主主義がようやく浸透しようとしていた。このような新しい時代を反映し、ブレザースタイルの制服に改定したものであった。昭和50年代に入って全国的にデザイン性の高い制服の導入が行われ、ブレザースタイルの制服が普及し始めたが、本校の制服はその先駆けともいえるものであった。この制服は昭和63年まで用いられることとなった。

瑞徳高等学校家庭科と商業コースの設置

昭和30年代、輸出拡大により日本経済は急成長し、白黒テレビ・洗濯機・冷蔵庫の家電3品目が「三種の神器」といわれるようになった。これら3品目の家電は、努力すれば手が届く夢の商品であり、新しい生活の象徴で

あった。昭和28(1953)年にはテレビ本放送が開始され、経済白書が「もはや戦後ではない」と明記し、戦後復興の終了を宣言したのは昭和31年である。

このような時代状況を背景に、家庭生活も大きく変わろうとしていた。そこで、時代に即応した新しい家庭を築くことを目的とする教育が必要ではないかとの見地から、昭和30年4月1日、家庭科1クラスを設置、特別教育活動では茶・華道に重点を置いた。普通科の「家庭職業」は22単位なのに対し、家庭科では36単位に増設。職業準備教育よりも将来の家庭生活準備の側面が強かったといえよう。

さらに、当時の社会の動向や保護者からの多様な要請に基づいて、昭和33年4月には普通科の中に商業コースを設置した。商業コースは後に商業科として発展していく。

国民体育大会と演劇活動

昭和25(1950)年6月に勃発した朝鮮戦争により特需景気が現出、戦後の混迷に沈んでいた日本に活況をもたらした。愛知県においては、同年10月28日より11月1日まで、名古屋市を中心として第5回国民体育大会秋季大

教科	科目	単位数	1年生	2年生	3年生	
国語	国語甲	12	3	3	3	
	国語乙					
	漢文		1	1	1	
社会	一般社会	9	4			
	日本史			3	2	
	世界史					
	人文知理					
数学	解析I	10	3	3		
	解析II				4	
理科	物理	12	2	2	2	
	化学		2	2	2	
	生物					
	地学					
保健体育	体育	9	2	2	2	
	保健		1	1	1	
芸術	音楽	8	2	2	1	
	美術		1	1	1	
	書道					
家庭職業	被服	22	3	4	3	
	食物		2		2	
	家庭・経営				1	
	家庭			3		
	計算実務		1	1	2	
外国語	英語	11	4	3	4	
小計			93	31	31	31
特別教育活動(HR・茶・華)			9	3	3	3
合計			102	34	34	34

教科	科目	単位数	1年生	2年生	3年生	
国語	国語甲	10	3	3	3	
	国語乙					
	漢文		1			
社会	社会	9	4			
	日本史			3	2	
	世界史					
	人文知理					
数学	解析I	8	2	3		
	解析II				3	
理科	物理	6	2	2	2	
	化学		2	2	2	
	生物					
	地学					
保健体育	体育	9	2	2	2	
	保健		1	1	1	
芸術	音楽	5	2			
	美術		1	1	1	
	書道					
家庭職業	被服	36	6	6	6	
	食物				4	
	家庭・経営			3	2	
	家庭		3			
	計算実務		1	2	1	
	保育家族			2		
外国語	英語	9	3	3	3	
(礼法)			1		1	
小計			93	31	31	31
特別教育活動(HR・茶・華)			9	3	3	3
合計			102	34	34	34



ノリノリブレザースタイルの制服(昭和27年・昭和28年)



ブレザースタイルの新しい制服(昭和28年～)

会が開催され、全国から約1万5,000人の選手が集まった。瑞穂公園陸上競技場を主競技場として26競技が行われたが、本校生徒もリズム体操に参加した。

戦後の高校では演劇が盛んになったが、本校においては昭和22年の創立記念日に開催された復興祭の折にも演劇が上演された。その後、昭和25年3月に設置された図書館が演劇活動にも利用されるなどして学校全体に広がっていった。同年11月には、10日・12日の両日にわたり中日会館において校内演劇コンクールが行われるまでになっている。同コンクールには中学2年生から高校3年生までの8クラスが参加、盛会であった。

そして昭和26年1月、第4回中部日本演劇コンクール（中部日本新聞社・愛知県高校演劇連盟主催）に出場、演目「部屋の中」が第3位に入賞した。中部日本演劇コンクールへの参加は、昭和22年、昭和23年に次いで3回目、精進の結果の榮譽であった。

校外活動・クラブ活動の活性化

修学旅行のほかにも、キャンプや水泳実習などの校外活動が充実していた。キャンプについては、昭和25（1950）年7月末に三重県御在所岳一の谷において、昭

和28年8月には長野県の上高地でそれぞれ有志によるキャンプが行われた。このころ、特に力を入れていたのが水泳訓練である。昭和25年7月には常滑市の大野海岸で、同年8月には知多市の新舞子で水泳訓練を行っている。昭和28年には夏休み前の7月15日に全校生徒が知多市の長浦海岸で海水浴を行っている。翌年7月にも長浦での水泳実習が行われていた。

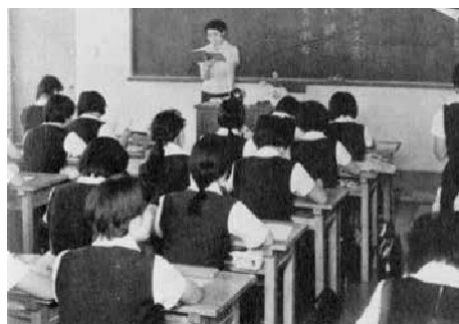
社会見学や夏のスケッチ会なども実施されており、多彩な高校生活を送っていたことがうかがわれる。クラブ活動についても、昭和26年には卓球部、軟式庭球部、ソフトボール部、バレーボール部、華道部、茶道部、美術部、図書部などのクラブが発足、活動を始めていた。

北海道への修学旅行の開始

本校では、早くから修学旅行を実施しており、終戦後は、昭和21（1946）年に京都・奈良方面への修学旅行を開始して以来、次第に遠方へ足を伸ばしていた。昭和26年には、落ち着きを見せてきた世情を反映して、初めて九州・中国方面への修学旅行を行った。さらに翌年には、東北・北海道への9日間の修学旅行が実施された。この旅行では、当時東北大学医学部の教授であった瀬



家庭科の実習



商業コースの授業風景



木三雄教授が協力し、長距離旅行での疲労と身体異常の調査を行っている。北海道への修学旅行は愛知県下初でもあったため、大きな関心を持たれ、新聞にも取り上げられた。

以降しばらくは、九州・四国方面と北海道への旅行が1年おきに行われることとなった。その後、北海道への修学旅行が定着したが、1週間に及ぶ修学旅行は愛知県下でも珍しく、本校の名物行事となった。

瀬木本立理事長就任

瀬木本立理事長に

昭和32（1957）年9月1日、学園の創立者である瀬木本雄理事長が逝去した。享年83歳。本雄は寡黙にして決断力・実行力に富み、私財を投げ打って女子教育のために尽力したほか、愛知県眼科医会長や三重県人会幹事長も務めた。9月4日、中村区花車町（現・中村区名駅）の浄信寺で告別式が営まれ、各方面からの会葬者が故人の生前の徳をしのいだ。



長崎・広島方面への修学旅行（昭和36年度）

第二



鉄筋コンクリート造の1号館



短期大学の校舎（2号館：昭和35年竣工）

代理事長に就任した。本立は東京帝国大学医学部卒業後、父親と同様にヨーロッパ留学を経験した医学博士である。昭和11年からは瀬木眼科病院の副院長に就任していた。瑞穂高等女学校の創立に尽力、瑞穂高女、瑞穂中学校・瑞穂高等学校の初代校長を務めた。一方、短期大学を創設し初代学長に就任、総合学園としての瀬木学園の地位を不動のものにした。昭和25年5月には、愛知県私学協会事務局長の要職に就任、本県私学の発展のために精力的な活動を続けていた。

鉄筋コンクリート造りの校舎の建設

昭和33（1958）年8月15日、地鎮祭を行い、鉄筋コンクリート造りの校舎の建設に着手した。昭和34年3月31日に鉄筋コンクリート3階建て校舎1棟が竣工、1号館と呼称した。

翌年3月31日には短期大学の校舎として、鉄筋4階建て1棟（2号館）が竣工した。昭和35年6月に南側を竣工、昭和39年10月に全棟が完成し、近代的な校舎の形を整えることができた。

伊勢湾台風で生徒3人死亡

昭和34（1959）年9月26日午後6時過ぎに和歌山県潮岬に上陸した台風15号は、全国的に大きな被害をもたらした。伊勢湾周辺地域、名古屋市を中心とする臨海低平地に未曾有の大災害を引き起こし、後に伊勢湾台風と命名されることになった。名古屋では最大風速37.0m/秒（最大瞬間風速45.7m/秒）を観測。暴風や気圧低下による高潮を引き起こし、名古屋港沿岸の各所堤防を決壊させ、名古屋市南部を中心に大量の流水と流出した貯木場の木材が建築物を破壊した。特に人的被害が大きく、犠牲者の数は5,098人に上った。台風による死者・行方不明者の数としては明治以降最大となり、その約9割が愛知・三重両県に集中していた。

本校においては、土曜日で午前授業であったため、帰宅途中の被害者はなかったが、自宅において3人の生徒が命を奪われた。そのほかにも、生徒の家族十数人が亡くなり、自宅が被災したため、あるいは通学が困難になったため名古屋市内に寄宿することになった生徒も70人以上に上った。昭和34年11月26日、学校近くの大喜寺（名古屋市瑞穂区）において伊勢湾台風の犠牲となった3人の生徒の慰霊式が執り行われた。



伊勢湾台風殉難生徒の慰霊式



生徒集会

3

第3章 学園の充実発展と近代的施設の完成

疫学的研究者の瀬木三雄が 学園理事長・校長に就任

昭和35(1960)年9月、東北大学の疫学的研究で世界的な名声を博していた瀬木三雄が理事長・高校の校長に就任、短大および高等学校の拡張充実に尽くした。高度経済成長期と高校生の急増期にあつて、昭和38年4月1日に、高校は商業科1クラスを設置、普通科・商業科・家政科の3学科を持つことになった。5号館までがコの字型に配され、校舎と教育設備がさらに充実した。運動のための設備も整えられていき、新体育館に続いてプールや弓道場が完成、運動部の活躍もめざましいものとなった。

定員の増加が続いていた短期大学では、昭和44年4月、養護教諭養成施設として認定され、学生の資格取得の選択肢が増えた。さらに昭和50年には瀬木学園メディカルセンターが設立され、学園設立の趣旨に添った教育の場として活かされることになった。昭和50年代には学園の施設拡充計画が進められ、東校舎や体育館が建設された。

昭和35(1960)年



昭和56(1981)年

瀬木三雄理事長・校長就任

瀬木本立理事長・校長の逝去・ 瀬木三雄理事長・校長就任

瀬木本立理事長・校長は、昭和35(1960)年9月13日、病気のため逝去した。享年57歳。突然の他界であった。瀬木本立理事長・校長は、私学総連合会事務局長、愛知県眼科医会会長などを務めたほか、在名三重県人会会長、名古屋市立大学後援会副会長など社会的活動にも奔走。生前の功績により正六位勲五等瑞宝章が贈られた。

昭和37年2月24日、校庭の北側中央に瀬木本立理事長・校長の胸像が完成し除幕式が行われた。胸像の建立はPTAを中心に中学校・高校・短大の職員および瑞穂会・瑞葉会（短期大学の同窓会）が結集し、本立の頌徳記念事業として計画された。高さ1mのブロンズ製の胸像は、名古屋市内在住で日展会員の彫刻家・高藤鎮夫の手になるものである。御影石の台座の背面には、愛知学院大学の創設者にして初代愛知学院長の小出有三の撰文が刻まれた。そこには、「慈恩に浴せし人々、所



瀬木本立勲記



瀬木本立胸像



理事長・高校校長 瀬木三雄

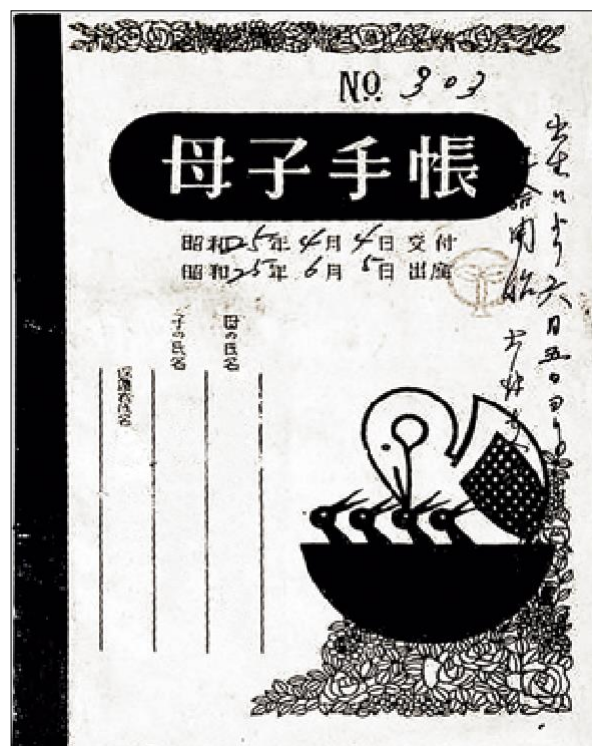
縁の校庭に胸像を建て、永くその威徳を讃う。」と刻まれた。

昭和35年9月17日、瀬木本立の後任として、がんの疫学的研究で世界的な名声を博していた弟の瀬木三雄東北大学教授を迎えた。

母子手帳の創設と「瀬木の帽子」

第三代理事長に就任した瀬木三雄は、本学園創立者である瀬木本雄とせき夫婦の三男として生まれた。東京大学医学部を卒業後、文部省（元・文部科学省）在外研究員としてドイツに留学、旧厚生省に東大の産婦人科から嘱託として入省した。この間の昭和17(1942)年、「妊産婦手帳」を創案した。手帳により戦時下においても物資の優先的な配給が保証されるとともに、定期的な医師の診察を促すものであった。さらに昭和22年、初代母子衛生課長に就任、「妊産婦手帳」を「母子手帳」と改める制度を創設して内容の充実を図った。戦中・戦後の混乱期を通して妊産婦と乳児の健康管理システムの充実に貢献した。

昭和25年7月より、東北大学医学部にて公衆衛生学教室を主宰、疫学的研究に専念していた。がん統計学



母子手帳

の第一人者として知られ、いわゆる「瀬木の帽子」(胎児の基底顆粒細胞集団)の発見者でもある。「瀬木の帽子」じゅうもうとは、胎生後半期、5カ月以後の胎児の小腸の絨毛の先に、円盤状に存在する内分泌(基底顆粒)細胞の集団である。生後間もなく、赤ん坊が乳を飲むようになると、この細胞集団は消失する。この特異な細胞集団を発見し、初めて正確に記載したのは三雄であった。発見者である瀬木三雄にちなんで、後に「瀬木の帽子」という名称で呼ばれた。

3号館竣工

昭和30年代は空前の建築ラッシュともいうべき校舎の建設が続き、昭和37(1962)年4月4日には3号館が竣工した。4階建ての色鮮やかな校舎で1号館と向かい合わせに建てられた。音楽室の机が階段式になっていること、1階から2階への階段は螺旋階段になっていることが特徴で、いかにも女子校らしい洗練された建物であった。

総合的な高等学校誕生

商業科の設置

高度経済成長期を迎え、本校では施設設備の充実とともに、内容の充実・多様化が図られた。昭和30(1955)年に家庭科(後に家政科と改称)を設置したことに続いて、昭和33年4月に普通科の中に商業コースを設置した。さらに昭和38年4月1日、これを発展独立させて商業科1クラスを設置した。これにより、瑞穂高等学校は普通科・商業科・家政科の3学科を持つ総合的な高等学校となった。

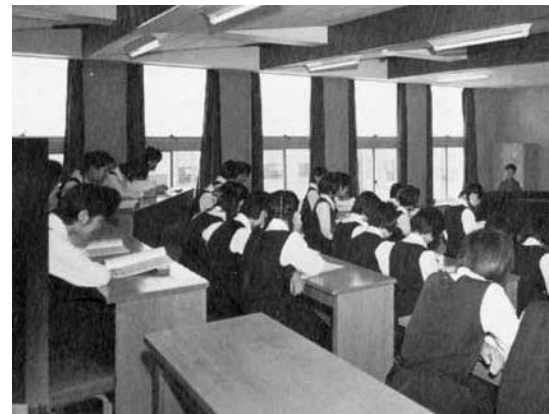
商業科の設置は、昭和38年度から本格化する高校進学者の急増に備えるという一面もあわせ持っていた。昭和38年度から昭和40年度にかけての3年間、日本はいわゆるベビー・ブーム世代の高校進学によって高校生急増期を迎えた。高校進学率も高度経済成長期に上昇を続け、昭和36年に60%を超え、昭和40年には70%にまで達することになる。高等学校は、ほとんどの青少年の後期中等教育を一手に引き受ける機関となり、高等学校自体の多様化が要請されていた。高校生急増への



建設中の3号館



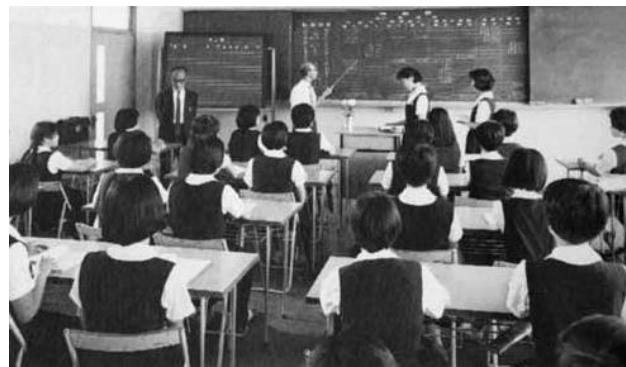
2階へは螺旋階段で



3号館の階段式音楽室



和文タイプ室



商業簿記室

対策として実施された全国の高校の新設、学科の改廃、学級数の増加にあたっては、普通科に比して職業科の定員が大幅に増やされた。経済界の発展や高度経済成長期の技術革新により、それに対応できる知識を有する人材が求められるようになったからである。本校における商業科の設置は、そうした時代の流れを見据えたものであった。

商業科の設置に伴い、昭和38年5月10日には4号館を建設した。4号館には、物理実験室や被服実習室のほかに、商業科の設備として商業簿記室と和文タイプ室が設けられた。

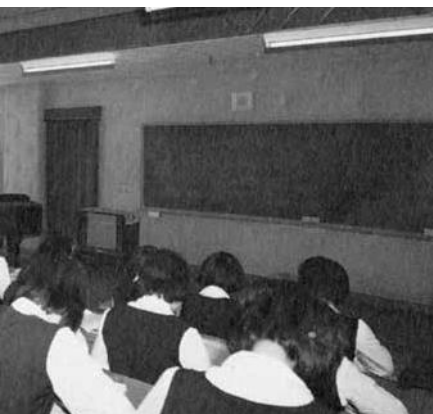
商業科の設置によって本校の設備もさらに充実することになったが、一方では学校のマンモス化も避けられない結果となった。昭和37年5月には、愛知県教育委員会が私立高校のすし詰め学級の実態調査を行っているが、本校においても、昭和39年度から昭和42年度にかけては1学年10クラス以上、1クラス60人強という状態となった。なお、商業科希望者が多く、昭和44年以降普通科の希望者が減少する傾向が続いた。

魅力ある高校づくり

昭和38(1963)年に実施された新教育課程は、社会の要請に応じて、生徒の能力・適性・進路に合わせた適切な教育を施すことを狙いとした多様で弾力性のあるものであった。その時期、本校においては、古い女子教育から脱皮して新しい女子教育への模索が続いた。高度経済成長期と高校生の急増期にあって、魅力ある高校づくりこそが差し迫った課題であった。

商業科の設置もその一つであったが、伊勢湾台風の教訓から水に強い女性を育成することが急務とされたため、昭和38年には、三重県伊勢市の二見浦での水泳実習が4泊5日で行われた。3年後の昭和41年には水泳部が発足した。昭和41年12月末の冬休みには、長野県志賀高原熊ノ湯においてスキー訓練が実施された。生徒57人が参加、そのほとんどが初心者であったが、体育科の教諭の指導のもと4泊5日の訓練で目を見張るほどの上達を見せた。

さらに、新しい高校教育の一助にすべく、昭和37年12月、第1回海外派遣(ハワイ研修)が実施された。派遣されたのは短期大学の講師と短期大学2年生、高校3年生の計3人で、マッキンレー高校を訪問し授業も参観



被服実習室

した。自ら海外留学の経験を持っている瀬木三雄理事長の発案によるものであったが、国際理解教育やグローバル教育が一般的になるのはまだ先のことであり、本校の海外研修は新聞にも大きく取り上げられた。これに続いて昭和40年には第2回海外研修が行われ、教員4人が参加した。県費の助成による教員の海外研修が開始されたのは昭和45年のことであり、本校の取り組みは先駆的なものであった。

森義昭が校長に就任

昭和42(1967)年8月、瀬木三雄は理事長・校長・学長を辞任、学園長として学園全体を統括する立場となった。副校長を務めていた森義昭が高校の校長に、瀬木せきが短期大学の学長に就任した。その前年には加藤博が中学校の校長となっている。その後、瀬木三雄は昭和46年に再び理事長・学長に就任し、さらに同年、東北大学名誉教授の称号を授けられ、さらに日本対ガン協会賞を受賞するなど、研究者としても高い評価を受けた。森義昭は名古屋市内の高等学校で教壇に立ち、名古屋市教育委員会事務局の学務課長、教務部長も務めた。

昭和42年には、1号館2階の化学実験室と生物実験

室の改修を行い、同年9月には豊富な実験器具や薬品が備えられた。

ロの字型の校舎、運動場も整備

4号館建設に少し遅れて、昭和44(1969)年10月に5号館が完成、中央の校庭を囲むように校舎がロの字型に配された。5号館には中学校教室が置かれたほかTM(ティーチング・マシン)教室も設けられた。視聴覚機器を用いた教材で個別指導を可能にした。近代的校舎の建設に続いて、運動のための設備も整えられていった。

創立25周年記念祭

昭和39(1964)年、本学園は創立25周年を迎え、12月には創立25周年記念祭が行われた。

瑞穂会創立20周年

昭和40(1965)年3月20日、瑞穂会は創立20周年を迎え、名古屋市公会堂(昭和区鶴舞)で創立20周年記念総会を開催した。在校生も招待しての行事であり、約1,500人が出席、盛大に執り行った。午後からは会員の家族による余興を楽しんだ。



第1回海外研修



化学実験室



日本対ガン協会表彰状



ロの字型の校舎全景

創立20周年記念事業として同窓会名簿（第2号）を発行するとともに、市内の児童養護施設の金城六華園（瑞穂区門前町）とひばり荘（瑞穂区弥富町）にそれぞれストーブ3台とオルガン1台を贈った。東山動物園にて1日母親活動を展開したほか、同窓会会員とその家族による演奏会を開催し児童養護施設の園児を招待した。

瑞穂会の会長は、昭和49年に瀬木三雄理事長・学長に代わったが、それまでの約30年間にわたって三品嘉子が務めた。

瑞穂短期大学の充実と発展

瑞穂短期大学専攻科設置

昭和35（1960）年、瀬木学園理事長・短期大学長に就任した瀬木三雄は短期大学の進化を図った。特色ある幅広いカリキュラムを組み、先進的な発展の基礎を築いた。昭和37年3月には中学校教諭の保健の免許状授与課程として認定を受け、同年4月、短期大学の募集人員を150人に増員した。

昭和38年4月には専攻科を設置。専攻科は、修業年

限1年、衣服材料学、衣服整理学あるいは栄養学特論、食品衛生学などの家政科の専門科目、その他学校保健学に関する科目について、さらに高度な科目30単位以上を取得した者に修了証書が授けられる。専攻科の修了生は年ごとに増加し、昭和43年度から昭和48年度までは毎年5人から10人前後の者が修了して栄養士や養護教諭として活動した。専攻科が設置された時代の要請に応えたものだが、その後は減少の一途を辿った。

短期大学の定員の増加

短期大学は、2年という短期間で実際的な専門教育が受けられるため入学希望者も多く、昭和39（1964）年に恒久的な制度として学校体系の中に位置づけられた。この年の全国の短期大学の学生数は、発足時に比べ4.6倍（女子は8.6倍）となっている。高度経済成長と第一次ベビー・ブーム世代の進学要求、特に女子の高学歴志向という時代の波に乗り、短期大学は女子教育機関としての色彩を強めていった。全国で短期大学が相次いで創設されたが、瑞穂短期大学の定員も、昭和35年に100人となり、昭和37年には150人、昭和41年には250人まで増加していた。



ストーブとオルガンの贈呈

瑞穂会館寮完成

本学園の寮は、昭和31(1956)年に小酒井ひさゑ教授宅に瑞華寮として開設され、昭和52年3月まで存続していた。また昭和39年2月には宝田町に瑞穂学園寮が建設された。

その後短期大学の学生数の増加に伴って入寮希望者も増え、学園寮1部屋に5、6人を受け入れざるを得ない状況になった。そのため新たに寮を増設することになり、昭和44年4月、瑞穂区市岡町に瑞穂会館寮が完成した。

瑞穂会館寮は、地上5階、半地下1階の堂々たる建物で、13室の寮室のほかにゲストルームや食堂、浴場、ホールが設けられた。半地下は駐輪場となっており、近代的な設備を備えた豪華な寮として話題を呼んだ。また、瀬木三雄校長が視察した諸外国のドミトリーを参考にした治療栄養研究所も設置された。

養護教諭養成施設として認定

昭和42(1967)年8月から昭和46年3月まで瀬木せきが短期大学長を務め、瀬木三雄は学園長として統括したが、その後再び短期大学長に就任した。昭和44年4月、数度の入学定員の増加により250人となった家政科

の専攻分離が認められ、家政専攻50人、食物栄養専攻200人とした。

昭和44年2月には、養護教諭免許状授与課程として認定された。すでに認められていた中学校の家庭科教員免許状に加えて養護教諭の資格取得が可能となったことで、瑞穂短期大学の名声は全国的にも高まり入学希望者が格段に増加した。

昭和45年には家政科を家政学科に改称、さらに翌年には、新しい分野として保健家政学・予防栄養学・治療栄養学などをカリキュラムに組み入れ、瀬木三雄学園長自ら講義して、建学の理想の具現に努めた。一方、短期大学の施設の充実も図られ、昭和47年に西校舎、昭和55年には図書館が完成、瑞穂短期大学の基礎が築かれた。

創立30周年と運動部の活躍

創立30周年

昭和45(1970)年、本校は創立30周年を迎え、多彩な記念行事が行われた。同年の学校祭(文化祭)の折に



瑞穂会館寮

は、1 教室を利用して本校の歴史をまとめた「学園の歩みコーナー」を設置した。以降、毎年の学校祭には必ず「学園コーナー」が設けられ、写真をはじめとする資料が展示されることとなった。それらは、後に『創立五十周年記念誌』の編集に活かされることになる。

瀬木三雄学園長は創立30周年を期して「瀬木学園新聞」に「職能課程両全をめざす」と題する論文を掲載、新しい保健家政学の基本構想について述べている。それには「家政学の分野に医学衛生的の面＝保健家政学を重視するようにしたい」とある。このとき、より建学の精神を明らかにすべく、短期大学「家政科」の名称を「家政学科」に改めたものと思われる。

新体育館完成

昭和40年、専用のテニスコートが設けられ運動場も整備されたことで、本校の生徒は恵まれた環境のなかで思う存分練習ができるようになった。その効果はすぐに表れ、昭和43（1968）年には軟式テニス部が初めて全国高等学校総合体育大会（インターハイ）に出場を果たした。それ以降軟式テニス部は、インターハイの常連校となっている。



生徒集会

昭和47年に西校舎（新体育館）が完成、5月31日、体育館開きが行われた。広い体育館の中央には、バレーコートとバスケットコートが交錯するように2面ずつ造られた。同年8月には、卓球部（ダブルス）もインターハイに初出場を果たすなど、運動部の活躍がめざましかった。

プールハウス・弓道場の完成と部活動の活躍

昭和49（1974）年6月には、古いプールを壊した跡地に新しいプールが完成、10日にプール開きが行われた。コースは5コースであり、腐食しない総アルミニウム合金製の溶接プールである。消毒槽、シャワー、休息所も完備された。本校水泳部は、昭和45年8月のインターハイに初出場を果たすなど、活躍を続けていた。

本校の弓道部は昭和40年4月に発足し、昭和47年にはインターハイに初出場するなど好成績を挙げており、翌年のインターハイでは準優勝に輝いた。

昭和52年9月24日、瑞穂区大喜町に新しい弓道場が完成し、道場開きが行われた。半鉄骨木造平屋建てで5人立ちが可能な射場と、2階建ての的場を設置。シャワー室や巻藁室^{まきわら}、更衣室、照明設備も完備しており、近隣の高校では類を見ないものであった。道場開きには、



体育館内で



インターハイに初出場したテニス部（入場行進）



水泳部

愛知県立犬山高校と大府市立大府中学校の弓道部員らも含めて約200人が参加、本校弓道部員の矢渡しを皮切りに、古式にのっとった礼射が披露された。

昭和53年10月、福島市の信夫ヶ丘競技場で開催された同年度のインターハイには、水泳部・卓球部・弓道部がそろって出場を果たし、学園中がその活躍に沸いた。

メディカルセンター設立とその役割

メディカルセンター開設

本学園は、衛生思想の普及向上と保健衛生の前進を建学の精神の一つとして発足したが、さらに教職員と学生生徒の健康維持について万全を期すために、昭和50(1975)年4月、瀬木学園メディカルセンターが開設された。センターは医療法の規定による診療所として仲谷義明愛知県知事から公認された。

さらに昭和53年5月、メディカルセンターの新しい施設が完成した。一般の保健室のほか、弓道場が移転した跡地にセンターの医務室・資料室、進路指導室からな



インターハイ準優勝の弓道部員

る1棟が新築された。昭和60年には、進路指導室が他の棟に移ったので、ここもセンターの休養室に改装された。

メディカルセンター所長には瀬木三雄学園長が就任し、医師が常勤した。当時としては最新式のコンピューター自動診断解析装置付心電計、自動尿成分解読装置、血圧計、体重測定器などの医療器具も設置、衛生教育用のビデオも整備され、学生・生徒および教職員の保健医療に活用されることになった。全国の国公私立中学・高等学校に類のないメディカルセンターの完成により、本学園の学校保健は医療行為にまで入ることが法規的にも実際的にも可能となった。

なお、瀬木三雄学園長は、がん疫学的研究に貢献した功績により、昭和49年9月、保健文化賞および厚生大臣表彰を受けた。さらに翌年5月には中日文化賞を受賞、昭和54年の秋の叙勲に際しては、勲三等旭日中綬章に輝いた。

瑞穂学園衛生会を組織

メディカルセンターのような施設は通常の大学・高校には設置されておらず、本学園の大きな特色となった。運



新設された弓道場の道場開き



メディカルセンター



営経費は一般の教育費とは異なるため、事業後援団体として、昭和54（1979）年6月、「瑞穂学園衛生会」が組織された。6月2日に各学級より2人、職員8人を加えて設立準備委員会を開催、16日の設立総会で準備委員会の審議どおり決定し、設立。事務所を学園内に置き、学生・生徒の保護者および教職員ならびに本会の目的に賛同する学園縁故者が会員となり、会長は会員から選出した。建学の理念に基づき保健衛生の教育活動の振興と援助を目的として活動し、特に学校保健事業の先駆的事业であるメディカルセンターの維持および活動に対して物心両面において協力した。

メディカルセンター設置要綱制定

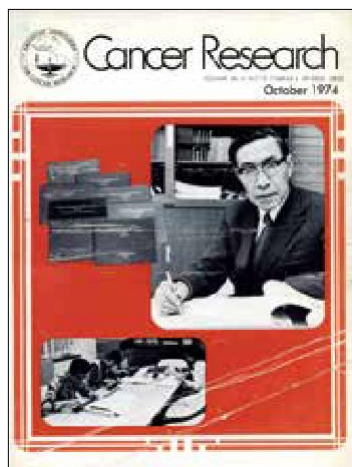
昭和57（1982）年の初代所長瀬木三雄学園長の逝去後は、短大教授の高取常三郎がメディカルセンターの所長を務めた。同年10月、浅井一太郎学長によりメディカルセンター設置要綱が定められ、センターは学園組織の一つとなった。

センターの設置要綱には、主要目的として学生・生徒、教職員の健康管理のほかに、患者が発生した場合の指導および応急処置、学生・生徒に対する健康上の教育

活動が掲げられた。日常的な業務としては、学生・生徒、教職員の疾病相談および手当や外傷などの簡易な処置が行われ、常時欠席者数などの調査を行うこととなった。

さらに昭和58年にはメディカルセンター内に「心の相談」が開設された。学生・生徒の健康診断については、学校保健法に定められた一般的な検診のほかに、心電図検査、貧血、コレステロール、B型肝炎抗原抗体等の検査を行った。体育の持久走と修学旅行にあたっては、特別健康調査を実施して安全確保に万全を期していた。教職員についても、一般の検診のほか、昭和60年度からは血液精密検査を実施している。同年度より環境衛生事業として、水道水、ウォータークーラーの検査も定期的に行うようになった。

虎ノ門病院院長であった浅井一太郎学長による特別診察指導も随時実施し、相当数の難病患者が専門病院に紹介され救済された。昭和62年には、人体病理や耳鼻科・眼科の相談日も開設された。いずれも診断と指導のみで治療は行わなかった。



米国医学雑誌の表紙を飾る瀬木学園長

おめでとうございます 学園長先生



お喜びの学園長先生

東北大学名誉教授
医学博士 瀬木三雄

勲章をいただきました

昭和五十四年の秋の叙勲章をいただきました。この関係の方々、事務関係の人に際して、勲三等旭日中綬章（手続は直接には東北大学の）をわすらわしたものであります。

このたびは学園長先生が名誉な勲章をお受けになりました。先生は癌の疫学研究の面で世界的な権威として長年、国際的な活躍をして来られました。私達一同からお祝いを申し上げます。先生から一文をお寄せいただきました。

文化の日、朝、名古屋のNHKの朝のテレビ・ニュースで、当国研究室を紹介されました。今回勲章をもらう人の代表的立場として私が選ばれたことは嬉しく思いますが、私としては「この国に平和の時代が続き、その平和の一つのシンボルとしてこのような勲章の制度が保持されていることを喜ぶ」と私は取材に来られたNHKの記者にこのような話をしました。

十一月九日、国立劇場での授章式に出席しましたが文部大臣は事実上欠員の時であり、皇居も認証式の日に当たり、難航した組閣の影響が感ぜられました。

勲三等 旭日中綬章に輝かれる

このたびは学園長先生が名誉な勲章をお受けになりました。先生は癌の疫学研究の面で世界的な権威として長年、国際的な活躍をして来られました。私達一同からお祝いを申し上げます。先生から一文をお寄せいただきました。

勲三等旭日中綬章を授与した瀬木学園長

瑞穂学園施設の拡充

森記念賞創設

昭和52（1977）年9月25日、森義昭高等学校校長が心筋梗塞のため急逝した。享年70歳。森校長は、昭和42年の瀬木三雄校長の辞任に伴って高等学校校長に就任、翌年からは短期大学の学長事務取扱としての仕事も引き受け、まさに学園の支柱としての役割を担ってきた。森校長の死去により、瀬木三雄学園長が再び高等学校校長となった。

森前校長の学園葬は、10月20日に本校の新体育館において行われたが、その学園葬の後、遺族から金一封が寄託された。学園ではこれを原資として「森記念賞」を創設、本学園の生徒・教職員から勉学・体育、あるいは善行において特に優れた者を選んで賞状・賞品を授与することとした。第1回森記念賞は、昭和53年9月の「やまびこ国体」（長野県開催）において水泳選手として活躍した生徒2人に授与された。



第1回森記念賞に輝いた生徒

東校舎の完成

昭和50年代になって、本校の施設拡充計画が進められた。その第1弾として、昭和54（1979）年8月、北東の道路を隔てた角地において校舎（東校舎）の建設に着手、翌年5月に完成した。延べ床面積は2,000㎡、鉄筋コンクリート造りの3階建てである。1階は高校・短大兼用の図書館で、2階はテレビ等を備えた教室3室、視聴覚機器を用いて言語を学ぶランゲージ・ラボラトリー（LL）教室と視聴覚教室となっている。3階には畳敷きの和室と調理室、浴室があり、和室は礼法室として利用されたほか、同窓会やPTAの会合などにも利用できるように設計された。

瀬木学園図書館開館

東校舎1階に開設された瀬木学園図書館は、瑞穂短期大学創立30周年の記念事業として位置づけられた。前年の昭和54（1979）年、新図書館準備委員会が発足、他校図書館の見学などを行い、検討を重ねた。

新図書館は昭和55年5月21日に開館した。約557㎡、冷暖房を完備した広い閲覧室、ブラウジング・コーナー、司書室、書庫、整理室、ビデオルーム（ビデオ6台設置）



東校舎

からなり、近代的な設備を取り入れてそれまでの図書館とはイメージを一新した。奥の書庫は積層式2階建て、階下には4万冊の収容能力を持つ電動式密集書架が設置された。書籍の長期保管のため除湿器による空気調節が実施され、整理室と書庫の階上階下を結ぶ書籍運搬用小型エレベーターも設置された。

昭和56年「図書館利用規定」などの諸規定を制定、昭和58年には図書館報「みずほ」第1号が発行された。

短期大学創立30周年・学園創立40周年

昭和55(1980)年11月、西体育館において、短期大学創立30周年記念式典を挙行了した。翌年10月には、研究施設として北校舎が完成、近代的な実験・研究の施設が整った。

また、昭和56年3月には学園創立40周年記念行事の一つとしてハワイ教育事情視察旅行が実施され、若手の4教諭が12日間にわたる研修を行った。

瑞穂中学校休校

戦後の六三三制の実施に伴い、昭和22(1947)年4月に瑞穂中学校は開校した。しかし、義務教育の公立中

学校に対して私立の中学校の運営は困難の連続であり、生徒数が少数のまま続くこととなった。瑞穂中学校の卒業生は、昭和23年の第1回の206人に続き、翌年には273人を送り出しているが、昭和25年3月には31人にすぎなかった。特に愛知県の場合、伝統的に中学校進学時に私学を選択する子どもが極めて少ないという傾向もあり、昭和30年代には卒業生が一桁のまま推移するような状態であった。

昭和41年4月には、名古屋市の小・中学校の校長を歴任した加藤博を瑞穂中学校校長に迎えた。昭和44年10月には中学校校舎として冷暖房完備の5号館が新築完成したが、生徒数を確保し維持するまでには至らなかった。

昭和54年4月には、新美省三が中学校校長に就任したが、生徒数は一桁に減少し、さらに厳しい状態になった。ついに昭和54年度より生徒の募集を中止し、昭和56年2月28日の在校生8人の卒業をもって休校とする処置がとられた。瑞穂中学校の第34回までの卒業生数は、合計1,002人であった。

平成4(1992)年、愛知みずほ大学の開学を翌年にひかえ、瑞穂中学校を正式に閉校した。



視聴覚教室



LL教室



新図書館



創立50周年記念祝賀会



50周年記念式典

4

第4章 創立50周年、新たな時代へ

浅井一太郎が理事長に就任、 創立50周年を迎える

瀬木三雄理事長・短期大学学長が急逝。これを受けて、昭和57(1982)年5月、臨床医学の権威である浅井一太郎が第四代理事長に就任するとともに短大学長に就任した。

昭和58年5月、東体育館が完成、昭和61年3月には家政科の教室・実習棟として北校舎が竣工した。以降、およそ2年間にわたって校舎の大改修を行い、最新の設備を備えた教育環境が整った。

少子化によって昭和63年度をピークに高校進学者数が急激に減少することが確実であったため、生徒急減期への対応として魅力ある学校づくりを進めた。推薦入試制度の実施や制服の改定などを行った。平成2(1990)年、瑞穂高等学校は創立50周年を迎え、盛大な記念行事を催した。

昭和57(1982)年



平成4(1992)年

浅井一太郎、 理事長・短大学長に就任

瀬木三雄理事長・学長の逝去

昭和57（1982）年5月8日、瀬木三雄理事長・学長が心筋梗塞のため急逝した。享年74歳。35年に本学園の理事長・短期大学学長・高等学校校長に就任し、短大および高校の拡張充実に努めた。さらに、昭和42年8月からは学校法人瀬木学園の学園長として私学経営に尽力した。特に保健衛生に重点を置き特色ある教育を推進、次代の日本を担う子女の教育に傾注し、多くの人材の育成に当たった。

瀬木三雄前理事長の葬儀は、昭和57年5月11日、名古屋市中区（現・中村区名駅）の浄信寺で執り行われた。前理事長を乗せた霊柩車は、迂回して学校の前に停車し職員や学生の見送りを受けて火葬場に向かった。20日には西体育館で学園葬が行われた。学園の大黒柱の突然の逝去は、教職員、学生・生徒ばかりでなく教育関係者や学術研究者などの各方面に大きな衝撃と悲しみを与え、大勢の参列者を迎えて盛大な告別式となった。生

前の功績をたたえて勲三等旭日中綬章を受章、正四位に叙せられた。中央に掲げられた遺影の前に勲記・勲章、その他在りし日の業績をたたえる内外の賞状や表彰状が飾られた。

浅井一太郎、理事長（短大学長）就任

瀬木三雄理事長の逝去に伴い、昭和57（1982）年5月、理事を務めていた浅井一太郎が瀬木学園理事長と短期大学の学長に就任した。浅井一太郎は、東京大学医学部を卒業、瀬木本立・三雄兄弟のいここにあたり、学園の発展に陰ながら貢献してきた。昭和24年、大蔵省（現・財務省）診療所長に就任、その後東京の虎ノ門病院の創設（昭和33年）を手掛け、昭和48年には第三代院長に就任。長らく虎ノ門病院の経営と診療に携わってきた。本学園の理事長に就任してからは、虎ノ門病院長の職を退き特別顧問となった。

浅井一太郎理事長は臨床医学の権威として知られ、医師と患者の関係のように教授と学生間の精神的なつながりや信頼関係を強調するとともに教育環境の整備を進めた。

悲しみにつつまれる学園

学園長 瀬木三雄先生 逝去



いの中、ご遺族や来賓、本学園の職員、隣接短期大学の学生、隣接高等学校の生徒、各方面の方々など大勢の参列者を迎えて盛大な告別式となった。生前の先生のご功績をたたえて、中央に掲げられた遺影の前に勲記・勲章、その他在りし日の業績をたたえる内外の賞状や表彰状が飾られた。

ご遺徳をしのんで
しめやかに学園葬

去る五月八日午後四時四十五分、心筋こうそくのため急逝された故瀬木三雄前学園長の学園葬が、五月二十日午後二時から本校の西体育館で、しめやかに行われた。

悲しみは突然訪れた。大いのご参列をいただき、盛大な告別式が行われた。生前の先生のご功績をたたえて、中央に掲げられた遺影の前に勲記・勲章、その他在りし日の業績をたたえる内外の賞状や表彰状が飾られた。

この日、ご遺族や来賓、本学園の職員、隣接短期大学の学生、隣接高等学校の生徒、各方面の方々など大勢の参列者を迎えて盛大な告別式となった。生前の先生のご功績をたたえて、中央に掲げられた遺影の前に勲記・勲章、その他在りし日の業績をたたえる内外の賞状や表彰状が飾られた。



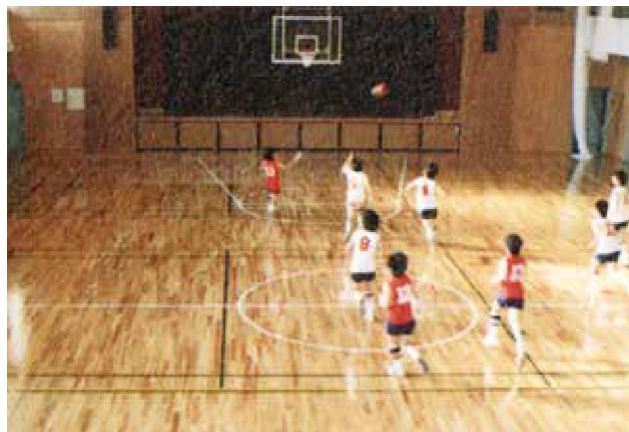
理事長・短大学長 浅井一太郎

瀬木三雄前理事長の学園葬

東体育館と南体育館の新築

新しい体育館が昭和58（1983）年5月に完成し、東体育館と命名された。先に完成した東校舎に続く本校の施設拡充計画の第二弾である。鉄筋コンクリート造り2階建て、延べ床面積1,174㎡。昭和56年に設計図ができ、それに従い1年かけて騒音・振動・通風などの問題について協議した。その後、近隣関係者の了承を得て昭和57年10月に着工した。ステージ付きのフロアはバスケットボールコート1面の広さを持つ。演劇、講演会、映画会などが可能なステージ下の格納庫には約500脚の椅子が収められている。照明設備、放送設備も完備し、玄関入り口右側には職員室と宿直室、更衣室が配置され管理用のスペースとなっている。入り口左側は生徒用スペースとして、生徒用の更衣室、シャワー室、トイレ、器具庫が配置された。2階にはトレーニング室と会議室があり、バーベルやダンベル、アブドミナルボードなどの運動器具を備えた。

昭和60年7月には、南体育館も完成。南体育館はその後卓球場として使用されることとなった。



東体育館

北校舎の完成

高校進学率は高度経済成長とともに上昇を続け、昭和36（1961）年に60%を超え、昭和40年には70.7%、昭和45年には82.1%に達し、49年には90%を超えた。本校の生徒数も急増し、校舎が手狭になってきたことから、その解決策として昭和58年に校舎増築用の土地を購入した。場所は、瑞穂区直来町1丁目、西体育館の北側、道路2本離れたところである。総面積1,344㎡。家政科の教室・実習棟として、昭和59年より北校舎建設委員会を組織して設計に取り掛かった。

昭和60年9月13日に地鎮祭を執り行って建設に着手、昭和61年3月31日に北校舎完工式が行われた。北校舎は2階建てで普通教室が6室、調理実習室と準備室、被服実習室と準備室、保育実習室、作法室、職員室からなる。玄関を入ってすぐの広いホール、明るい階段と踊り場に特徴があった。調理実習室と被服実習室にはいずれも最新式の設備が導入され、家政科は北校舎に移転した。

創立45周年を迎えて校舎の大改修

昭和60（1985）年創立45周年を迎え、同年10月名古屋国際ホテルにおいて記念式典と祝賀パーティーを開催



北校舎

した。

同年8月の夏季休暇中には校舎の改修に着手した。校舎の改修は2年間にわたって行われ、一般教室の床や廊下の改修とともに照明を増設、明るく新しい雰囲気の中で勉学ができるようになった。また、昭和60年には第1音楽室にオーディオ類の設備を設け、翌年には第2音楽室を新設して器楽室として整備、アンサンブルオルガン8台とキーボード4台を設置した。

理科実験室の改修も2年間にわたって行われ、昭和61年8月に完了した。物理実験室は視聴覚教室の機能も兼ねた設備として整備改修、化学実験室には各所に換気扇を備えて実験中に発生する有害物質を排除できるようになった。生物実験室は、顕微鏡観察が行いやすいように特に照明と電源の配置を改め、流しを増設した。教室の改修にあわせて、校庭も全天候型ラバーグラウンドへ改修した。

創立 50 周年を迎える

新教育課程の実施



創立45周年記念式典



全天候型ラバーグラウンド

の募集を取りやめ、一括募集を実施した。1年次は同一の教育課程で学び、2年次への進級時に普通科・商業科・家政科と分かれる。一括募集は62年度まで行われ、昭和63年度からは、入学当初から普通科（進学・教養）・商業科・家政科と分かれて学び1年次から専門教科を学習できるようにした。そして、生徒の多様な進路とニーズに対応するために選択教科の充実を図るとともに、和文タイプの授業ではワープロの実習を取り入れ、普通科教養課程にもワープロの実習を導入した。

推薦入試制度の導入

昭和60年代には、私学の多くが生徒数急減対策や補助金増額対策に取り組み、それぞれ生徒数の確保に向けて入試制度の改革などを行った。本校では昭和61（1986）年2月2日、一般入試（2月17日）に先行して初の推薦制による入試を行った。高校進学者の減少期を控えて、優秀な生徒を確保する必要があった。

生徒急減期への対応

昭和63（1988）年2月25日、第40回の卒業式が行われた。卒業生は706人、本校における最大の卒業生数



ワープロの導入



九州への修学旅行

であった。しかし、昭和63年度をピークとして、平成2(1990)年度以降は高校進学者が急激に減少することが確実であった。昭和63年4月、校内でも生徒急減対策委員会を設置しさまざまな問題を討議した。その一例として、1クラスの生徒数を45人前後とした。急増期の60人前後に比較して、担任教師の負担が軽減されるとともに、生徒の指導がしやすくなった。

一方、愛知県では、生徒急増期の昭和56年9月に、公立・私立高校の生徒の受け入れ比率を2:1に設定し、公私協調による計画的な生徒受け入れを行うこととなった。平成3年には、生徒減少期においても2:1を維持することを公私で確認している。

新制服の制定

昭和63(1988)年4月、高校制服の改定を行った。グリーンを基調としたタータンチェックのプリーツスカート、ともぎれ共布のベストに濃紺のブレザー、夏はグレンチェックのスカートに新素材を使用した白のブラウスである。デザイナーが2年間にわたって学校と協議しながら作り上げたもので、機能性を重視し新しい感覚にあふれていた。同年度の新1年生から着用、在校生にも本校志望の中



学生にも評判がよかった。

瑞穂高等学校創立50周年

平成2(1990)年、本校は創立50周年を迎えた。同年10月13日、東体育館において瑞穂高等学校創立50周年記念式典を挙行了。10月25日には、名古屋観光ホテル(名古屋市中区)で記念祝賀会を開催した。祝賀会は愛知県知事はじめ私学協会、小・中学校の校長、瑞穂会などの来賓多数を招いて盛大に行われた。

平成2年10月の学園祭は、「新たな扉を今」をテーマとして創立50周年にふさわしく盛大なものとなった。8日の開会式と合唱コンクールに始まり、9日仮装コンクール、11日は名古屋市公会堂におけるリンドバーグのコンサートで盛り上がり、12日・13日の両日は、クイズ選手権・野外コンサート・クラス活動など変化に富んだ1週間となった。さらに、19日、締めくくりとして瑞穂競技場で体育祭が行われ、創立50周年記念学園祭が終了した。

平成2年3月31日、『瑞穂高等学校 創立五十周年記念誌』を発行した。

■ バッジの変遷



昭和15年4月～
昭和18年3月



昭和18年4月～
昭和38年3月



昭和38年4月～昭和63年3月



昭和63年4月～
現在に至る



第5章 愛知みずほ大学の開学と短期大学の変革

男女共学の四年制大学 「愛知みずほ大学」が開学

平成5(1993)年



平成11(1999)年

平成5(1993)年、時代の要求する人間科学に関する専門知識・技術を身につけた人材の育成を目標として、愛知県豊田市に男女共学の四年制大学「愛知みずほ大学」を開学、人間科学部心身健康学科を設置した。大学の開学に伴い、瑞穂 短期大学を愛知みずほ大学短期大学部に改組、平成7年には、短期大学部家政学科を生活学科に改称した。平成12年、愛知みずほ大学人間科学部に人間環境学科(平成18年より人間環境情報学科へと名称を変更)を増設した。

一方、高校も変革の時を迎え、平成5年に家政科を廃止し普通科と商業科の2科体制となった。平成10年より校舎の全面改築に着手した。

愛知みずほ大学開学とその教育

開学に向けて

平成2（1990）年3月、豊田市平戸橋町に四年制の大学を創設することを公表した。大学創設にあたり、校地の拡張は長年の懸案であったが、昭和57（1982）年12月に約2万4,000坪の山林を購入、造成し、しばらくの間グラウンドとして使用していた。緑の山々に囲まれたこの静かな台地は、「人間らしさ」に注目する人間科学を研究するには理想的な教育環境であった。

人は誰もが健康で社会的・文化的に幸福感に満ちた人生を過ごしたいと願い、社会は豊かで活力ある健康社会であるべきとの認識に立って、人々の心と身体健康度を高めるということが求められる。学園は「健への教育」という学園の建学の精神をさらに発展させていく高等教育機関が必要と認識。新たに創設する大学ではこうした領域の研究を推進する人材の育成を担う。すなわち、豊かな人間性を育み国際的な視野を持ち、かつ地域の生活を踏まえつつ、健康科学を基本とする人間科学の専門的知識と技術を身につけた人材の育成である。

平成3年6月に、文部省（現・文部科学省）では大学審議会の答申を踏まえて、大学設置基準、短期大学設置基準などの諸基準の改正を行い、同年7月より施行した。この諸基準が大綱化・簡素化された結果、多くの大学で短期大学の定員振り替えや改組転換による新学部・新学科の設置などを中心にさまざまな改革が進められた。また、教養教育の見直しや専門教育の重視の流れが強まり、国際化・情報化などの社会の変化や環境問題に対応した教育内容の充実化が進められた。新大学の構想は、このようなことを背景として進められることとなった。

愛知みずほ大学開学

平成5（1993）年4月1日、男女共学の四年制大学「愛知みずほ大学」が開学した。人間科学部人間科学科（健康科学・行動科学・人間福祉の3専攻）を設置、医学的・科学的な視点を大切に、心と身体の両面から健康を探究する学びを展開することとした。多様なカリキュラムを設け、広い教養を身につけるとともに社会を生き抜く力を養う。

学園建学の趣旨を発展させ、「世界保健機関憲章」で



校舎外観



第1回愛知みずほ大学入学式



入学案内



講義棟200人教室



体育館プール

定める「健康の定義」に照らして、「身体の健康・精神の健康・生活文化としての福祉」を3つの大きな柱として、学際的・総合的に探究し、時代が必要とする人材の養成を図り、社会に貢献していくことを大学の基本理念とした。この基本理念については、端的に「健への探究—豊かで活力ある健康社会に貢献する人をめざして—」と表現している。

愛知みずほ大学短期大学部と改組

瑞穂短期大学の入学定員は増加を続け、昭和41(1966)年に250人となっていたが、愛知みずほ大学設置に伴い、平成5(1993)年4月より定員を150人に改定した。家政専攻50人・食物栄養専攻100人である。定員150人というのは昭和37年以来的ことであった。

第2次ベビーブームの18歳人口は、平成4年をピークとして、年々減少することになったが、その反面、大学進学率は5割を超えていた。女性の社会進出の増大の傾向を受けて、女性の大学進学率も大きく上がった。それと同時に大学設置基準の軟化によって四年制大学が増加、短期大学は打撃を受けて縮小傾向にあり、四年制へと移行するケースも少なくなかった。



理事長 瀬木和子

そのような状況下、学園は四年制大学と短期大学を併設し、緊密な連携を図っていくこととした。平成6年4月、瑞穂短期大学の名称を愛知みずほ大学短期大学部と改めて再出発した。

家政学科を生活学科に改称

瀬木三雄第二代学長は、生活科学としての家政学は「複合の学」として脚光を浴びるものであると力説していた。それから20年余りを経て、家政学は、人間を中心に自然、社会、文化の諸科学を統合し、人類の福祉に貢献する生活科学である、との主張が大勢を占めるようになっていた。また、浅井一太郎学長も、生活科学としての家政学について、科学的・医学的な見地に立って実生活を見つめていける教養ある女性の育成を教育の主眼とし、「家庭の営みに科学の心と目を」と強調し、重視してきた。

歴代学長の主張をより高く掲げ、生活科学としての内容を鮮明にすべく、平成7(1995)年4月、短期大学部家政学科を生活学科に改称した。それとともに家政専攻を生活文化専攻に改称、生活学科(入学定員150人)の専攻別入学定員を、生活文化専攻110人・食物栄養専攻



シャワー室完備のクラブハウス

40人とした。

医事管理士、医療管理秘書士資格教育指定校に

平成8(1996)年4月、東北大学において医学教育・研究に努めた西山明徳が同大学を退官後、短期大学部学長に就任した。さらに翌平成9年には、愛知みずほ大学の創設に尽力した瀬木和子医学博士(当時愛知みずほ大学教授・副理事長)が理事長に就任し、学園の進展の一翼を担った。

平成10年4月、短期大学部は医事管理士と医療管理秘書士の資格教育指定校となった。一般財団法人日本病院管理教育協会が認定する「医事管理士」は、医療機関において医療の事務処理を行いつつ、医療事務全般の管理を担うが、そのためには医療事務および一般事務を把握し、事務処理能力やマネジメント能力を身につけることが必要であった。また、「医療管理秘書士」は、高い情報処理能力などを活かして、秘書として医師をサポートでき、かつ医療事務全般の処理能力も高いエキスパートの資格である。

さらに平成11年4月にはフードスペシャリスト養成研修指定校となり、社会に貢献する人材の養成に一層努め

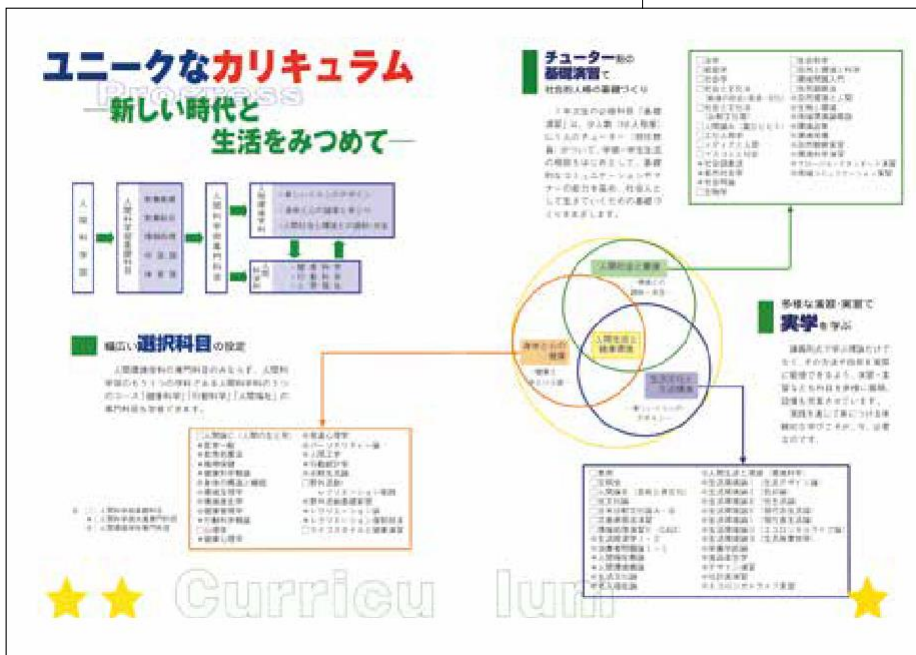
ていった。フードスペシャリストは、公益社団法人日本フードスペシャリスト協会が認定する資格であり、食に関する幅広い知識と技術を身につけた専門家である。食品の開発製造、流通、販売、外食などを担う食品産業をはじめ、食関係の広範な分野での活躍が期待される。

刈谷グラウンドを整備

平成10(1998)年に、愛知県企業庁と刈谷市の支援により刈谷市小垣江町に約1万9,500㎡の土地を取得することができ、グラウンドを整備した。300mトラック、100mコース、サッカーのライン取りがされており、グラウンドに隣接するクラブハウスにはロッカー、シャワー室も備えている。現在でも授業のほかにサークル活動でも活用されている。

愛知みずほ大学人間科学部に人間環境学科を設置

愛知みずほ大学開学から7年、平成12(2000)年4月、新たに人間環境学科を増設した。これにより、人間科学部は人間科学科(健康科学・行動科学・人間福祉)の3専攻と人間環境学科の2学科構成へと広がった。人間環境学科の定員は40人、短期大学部の定員を振り替え



人間環境学科時のパンフレット



る改組転換によって新学科を設置したものである。それに伴い、短期大学部生活学科の入学定員は、150人から110人(生活文化専攻入学定員70人・食物栄養専攻入学定員40人)に改定された。

人間環境学科は、人間と人間を取り巻く社会や文化的環境および自然環境、生活様式などを研究する学科である。自らのライフスタイルと未来の社会をデザインできる人材の養成を目標とした。環境計量士、環境カウンセラー、福祉住環境コーディネーター、インテリアコーディネーターなどの資格取得を目指す。環境・情報処理関係、福祉住環境関係、インテリア関係における企画・デザイン・営業や、公務員・各公益団体・企業など広い分野で貢献できる人材を育てる。

その後、人間環境学科は、平成18年度より人間環境情報学科へと名称を変更した。

私立短期大学図書館協議会東海・北陸地区の運営担当瀬

木学園図書館は平成10(1998)年および平成11年の2年間にわたる地区幹事校を経て、平成12年および平成13年の2年間、私立短期大学図書館協議会における東海・北陸地区の会長校を務めた。その後、さらに2年間

推薦幹事として次期会長校の補佐を務め、通算6年間、私立短期大学図書館協議会東海・北陸地区の運営に携わった。また会長校を務めた2年間は、総会、研修会、会報や「短期大学図書館研究」の発行など多彩な事業を行った。

当時、全国的に短期大学が低迷期を迎えており、図書館協議会を脱会する短期大学が少なからず続いたことと、加盟校へのアンケートによって負担軽減の要求が確認されたことから、本学図書館は会長校として私立短期大学図書館協議会規約の改正を図り、任務期間を通算3年間とした。

「みずほレター」発刊

平成12(2000)年4月、人間環境学科が発足したのを機に、愛知みずほ大学関係者を対象として「みずほレター」を発刊した。学生、学生の家族、卒業生、教職員のよりよいコミュニケーション手段の1つとして、情報の発信、交換を目的に年1回程度の発行とした。社会的・時代的な変化につれて大学への要請も多様化しており、本学では、「学生に選ばれる大学、社会に向き合う大学」を目標として掲げ、前年の平成11年5月にはホームページ



みずほレター

ジを開設していた。

高等学校の变革

家政科募集停止へ

平成5（1993）年、高校は家政科の募集を停止した。家政科は昭和30（1955）年に家庭科として設置、40年に近い歴史を持つが、時代の波により廃止することとなった。平成7年2月28日の卒業式に家政科最後の卒業生47人が巣立っていった。これにより、高校は、普通科と商業科の2科体制となった。家政科が入っていた北校舎は2年生普通科の5クラスが使用することとなった。

また、平成5年には夏服を変更し、スカートは冬服と同じ紺と緑のタータンチェックに統一された。变革の波は高等学校にも押し寄せつつあった。その1つに進路状況の変化がある。本校生の進路に関しては、就職者が6割、進学者が4割という状況が長年続いていたが、平成6年度の進路状況は完全に逆転し、就職者は4割未満にとどまった。これは、バブル経済崩壊後の好転しない景気の影響により就職状況が悪化したことに加えて、

18歳人口の減少、大学進学率の上昇などの社会的要因によるものと考えられた。このような時代状況のなかで瑞穂高校自身も变革を模索しつつあった。

週5日制の導入

学校週5日制は、学校、家庭、地域が連携して社会全体で子どもを育てることを目指すものである。また、国際的にも大半の国が学校週5日制を採用しており、わが国においても長期的な検討を経て導入され、平成4（1992）年9月12日から公立小中学校・高等学校の多くで毎月第2土曜日が休業日となった。平成7年4月22日からは第2土曜日に加え第4土曜日も休業日となった。また、平成6年度から新しい学習指導要領が学年進行で実施されることとなった。新学習指導要領は、中曽根康弘政権下での臨時教育審議会の答申などを踏まえて徐々に整備された「ゆとり」への方向性を反映したものであった。答申は、ゆとり教育の基本として、個性重視の原則・生涯学習体系への移行、国際化・情報化など変化への対応の3つを示した。

高校では、新学習指導要領の実施に伴い、平成6年4月から学校週5日制を実施した。県内の高等学校では



ホームページ画面



リニューアルした制服

週5日制の導入はまだ珍しかった。本校の実態に合ったカリキュラムの編成を軸に、高校生活にゆとりを持ち、学力にのみとられることのない人間形成に必要な教育を実践し、21世紀に向けてたくましく生き抜く気力ある女性の育成を目指したものである。学校週5日制に伴って授業時間数は減少することとなったが、進学などの不安に対応するために、新しい授業の試みとして「特講」を開始した。月曜日・火曜日・金曜日の7時間目を「特講」の時間として、国語を週1時間、英語を週2時間実施し、テキストや問題集を用いて実力アップを図っていった。

同窓会創立50周年

高校の同窓会である瑞穂会は、平成7（1995）年に創立50周年を迎えた。瑞穂会では、前年より50周年に向け記念事業実行委員会が発足し準備を進めた。

平成7年11月12日、ホテルナゴヤキャッスル天守の間において瑞穂会第50回総会を開催。11月19日より創立50周年記念行事として一般公開学習を実施、3回にわたって本大学教授による講演会を開催した。



瑞穂会第50回総会

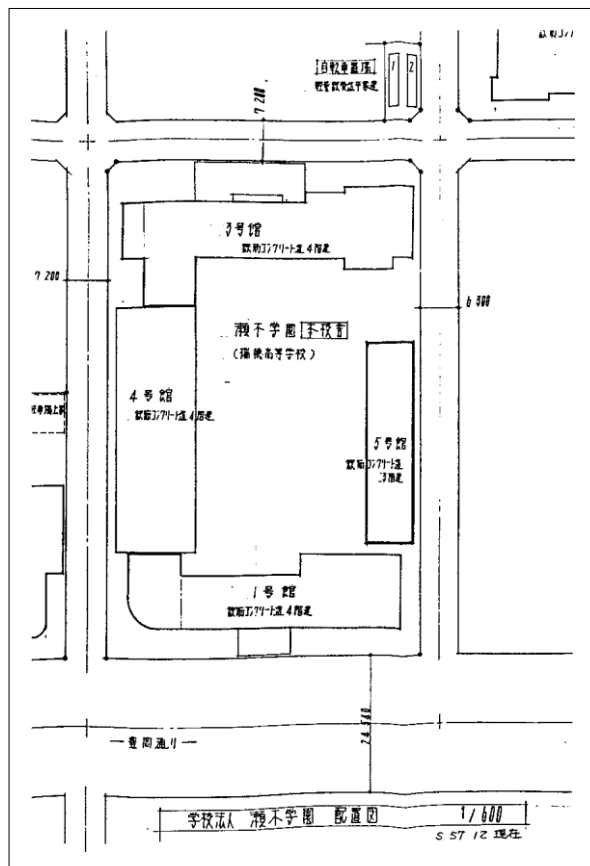


校庭に建てられた仮設のプレハブ校舎

瑞穂高校校舎の全面改築へ

平成7（1995）年9月、特別教室に続いて、本校舎1号館・4号館の普通教室に冷暖房設備が整い、使用を開始した。

平成10年5月、高校は校舎全面改築に着手した。4年の歳月をかけ、本校舎部分のすべてを建て替える。工事は3期に分けられ、第1期工事は平成12年3月までとし、1・5号館の解体を行いながら、1号館の跡へ6階建ての校舎を新築する。工事はボーリング技術を用いて行われ、騒音や振動音を最小限に抑えながら急ピッチで進行した。工事期間中は、校庭に仮設のプレハブ校舎を建てて職員室・事務室・進路指導室などの中枢部が移転したほか、平成9年度中は使用しなかった北校舎を再び普通教室として使用した。校庭が使用できなくなったことから、体育の授業は、西・東・南の3つの体育館をフルに活用した授業を展開した。



建て替え前の校舎配置図



男女共学化した高校

6

第6章 新世紀へ、男女共学化と大学院の設置

高校男女共学化と大学教育の充実

平成12(2000)年



平成24(2012)年

新世紀に入り、瀬木学園も大変革の時を迎えた。平成12(2000)年、高校の名称を「愛知みずほ大学瑞穂高等学校」に変更し、男女共学とした。平成13年12月には校舎の改築工事がすべて完了、名実ともに瑞穂高校はリニューアルした。また「魅力ある愛知みずほ大学瑞穂高等学校づくりプロジェクト」がスタート。教職員一丸となって取り組み、生徒の希望進路を実現していった。

短期大学部はホームヘルパー養成の指定校となり、生活文化専攻コースの再編など新たな魅力を模索した。

大学においても、平成15年、高度の専門家・職業人を育成することを目的として、大学院人間科学研究科を設置した。さらに、平成23年より5年間にわたる中期計画を策定、短期大学部校舎の改修を行うとともに、愛知みずほ大学名古屋キャンパスを開設、大学は豊田キャンパスとの2キャンパス制をとることとなった。

瑞穂高等学校の新校舎完成、男女共学へ

愛知みずほ大学瑞穂高等学校に改称

平成5(1993)年に愛知みずほ大学が発足したことにより、学園の設置する高等学校・短期大学部・大学が緊密な連携のもとに充実・発展を図っていくこととなった。この趣旨をより明確にするため、平成12年4月より、瑞穂高等学校の名称を「愛知みずほ大学瑞穂高等学校」に変更した。同年、高校は創立60周年を迎えた。

本校舎A棟完成

平成12(2000)年2月、高校の本校舎A棟が完成した。6階建てで、1階には進路指導室、体育準備室、事務室がある。2階には職員室や講師室、校長室、生徒指導室が配置され、3・4階にはそれぞれ6つの普通教室とコンピューター室・ワープロ室がある。5階は理科の実験室および準備室、最上階の6階は第1・第2の音楽室となっている。3基のエレベーターが設置され、ガラスを多用した外観が特徴である。



新校舎1階玄関奥のエントランスホールとロビー

平成12年3月15日、新築校舎A棟完成披露パーティーを開催した。同年4月、「愛知みずほ大学瑞穂高等学校」の新校名とともに新校舎での授業が始まった。

海外修学旅行の開始

平成12(2000)年6月、初めて4泊5日の海外修学旅行を実施した。オーストラリアを訪問、シドニーを中心にオリンピックの会場となったスタジアムやワイルドライフパーク動物園、オペラハウスなどを見学した。海外への修学旅行は、国際化時代を迎え、未来の国際人の育成を目指して行われた。治安の良さや見学・研修場所が豊富であること、旅客機の運航頻度が高いことなどから目的地をオーストラリアに決定した。2年生397人が参加したが、全員参加の海外修学旅行は愛知県では初めてのことであった。

その後、時代の流れや諸般の事情で参加できない生徒も増加傾向にあったことから、平成23年2月の実施時から国内コースを設定し、選択制を取り入れた形態となった。



オーストラリアへの修学旅行

瑞穂会創立55周年『語語録誌』発刊

平成12（2000）年、瑞穂会は創立55周年を迎えた。10月22日、ウェスティンナゴヤキャッスル（現・ホテルナゴヤキャッスル）青雲の間において第55回総会を開催するとともに記録史を編さん、刊行した。55年史は、本校の旧教職員や同窓生の語りによる冊子ということで『語語録誌』と名付けられた。当時の瑞穂会会長は、平野しなこ 鶏奈子が務めていた。

同年、本校は60周年を迎えて校名を変更、新校舎も竣工するなど記念すべき年となった。瑞穂会ではこれを祝い、また55周年記念として新しい校旗を贈呈した。

高校男女共学化

校名変更が続いて、平成13（2001）年4月から高校は60年余りの女子校の歴史に別れを告げ、普通科の男女共学化に踏み切った。それとともに、一人ひとりの個性に応じたきめの細かい授業を実施するためにコース制を導入、普通科に進学Aコース（主に難関私立大学や国立大学合格を目指すコース）、進学Bコース（進学を前提とした基礎学力の向上を図るコース）と生活インフォメーションコース（主に家政系、生活系短期大学、専門学校

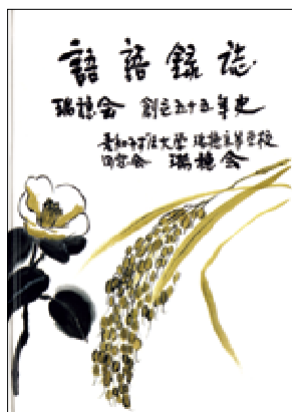
を目指すコース）を設置した。普通科の同年度の新入生は、前年度の2倍を超える377人となったが、そのうち男子は127人であった。

また、商業科は従来どおり女子のみとしたが、専門的な就職への対応を目指して2年生時からのコースを設定、経理事務を中心に学ぶ会計ビジネスコースとコンピューター技能を中心に学ぶOAビジネスコースの2コースとした。男女共学化を受けて新制服を導入し、通学カバンも変更した。女子の制服は、従来の制服を踏襲して改良を加えた。一方、男子の制服は、女子と同型のジャケットに同型のシャツ、ネクタイ、濃緑のチェック柄のスラックスとした。

校舎全面改築工事の完成

校舎の全面改築工事の第2期工事は、4号館を解体しその跡地に3階建てのB棟を建設、平成13（2001）年の3月に完成、同年4月から使用した。さらに第3期工事として、校庭や駐車場・駐輪場の整備を行い、平成13年12月にすべての工事が完了した。

これにより高校は、A・B棟の本校舎、東校舎、北校舎の三つの校舎棟と、東・西・南の3つの体育館を有す



『語語録誌』



建て替えた校舎



新しい制服

る学校となり、名称変更、共学化とあわせて名実ともにリニューアルした。

魅力ある高校づくりプロジェクト始動

少子化の波はとどまることなく進み、平成18（2006）年には高校受験となる15歳人口がピーク時の58%となり、その後も長く横ばいが続くと見られた。こうしたことに危機感を抱いた明壁正毅校長（平成15年就任）は、建学の精神「物事を科学的に捉え、的確に判断する能力の育成」を踏まえて「魅力ある愛知みずほ大学瑞穂高等学校づくりプロジェクト」を立ち上げた。

生徒・保護者に選ばれる魅力ある高校であるためには、生徒の希望する進路を実現させなければならない。そのために平成15年5月にプロジェクトの根幹をなす活性化委員会が発足、熱心な研究と討議がなされ、翌年1月に「答申書」にまとめられた。

答申の中核をなす「生徒の進路実現を図る36カ月シラバス」の作成は時代に即したものであり、進路指導部、生徒指導部、渉外部によるそれぞれの基調提案を教職員が共有し実践していった。それは教師の意識改革を迫るものでもあった。生徒の実力を把握したうえで教員は

指導法の改善とその伝承に努め、教育力を向上させていった。こうした教員の努力により、生徒には自ら考え自ら行動する姿勢が生まれ、一人ひとりに応じた実践が進路実現を確実なものとした。教員と生徒の人と人との真剣な勉学の間から強い絆が生まれ、学校を挙げての取り組みは信頼され魅力ある学校を実現させていった。

平成25年に明壁校長が退任、新たに就任した山口春久校長は、生徒募集や入学者概要、生徒指導や生徒動向の概要を毎年度データとしてまとめることで明壁前校長の取り組みを引き継ぎ、現在まで続けている。

珠算部全国大会で本校初の3位入賞

本校の珠算部は、早くから活躍を続けていたが、平成14（2002）年には、2年連続同じメンバーで全国高等学校珠算競技大会に出場、団体で本校初の3位に入賞した。個人の部においても、総合3位、伝票算競技2位という好成績を取めた。

卓球部も、同年8月のインターハイと12月の全日本卓球選手権大会に出場するなどの活躍を見せた。



「魅力ある愛知みずほ大学瑞穂高等学校づくりプロジェクト」冊子



校長 明壁正毅



校長 山口春久

進路実現、部活動に成果

高校の平成16(2004)年度卒業生は、国公立大学に127人が合格、かつてない成果を収めた。運動部の活躍もめざましく、平成17年には、卓球部は全国高等学校総合体育大会(インターハイ)に団体の部4年連続通算7回目の出場を果たした。ダブルスとシングルスにおいても県大会で優勝し、それぞれ4年連続、6年連続でインターハイに出場するなど、黄金期を現出していた。水泳部も4年連続でインターハイと国民体育大会のダブル出場を果たし、バレーボール部も2年連続でビーチバレーの全国大会に出場した。

また、珠算部も愛知県大会の各部門で優勝し、平成17年には全国高等学校珠算競技大会に15年連続16回目の出場を果たした。部活動に属さない個人においても、ボクシングでインターハイに出場したほか、フィギュアスケートでも国際大会に出場し好成績を収めた。

大学の充実と大学院設置

大学新校舎の完成

愛知みずほ大学では、講義棟の不足解消のため、校舎の増築に着手し、平成13(2001)年5月に起工式を行った。従来の講義棟と体育館の間の駐車場になっていたところに3階建てのB棟を建設、平成14年2月に竣工した。B棟は延べ床面積2,150㎡、演習室、中講義室、多目的教室のほか、3階には337席(固定机椅子306、壁面収納椅子31)の講堂兼用の大講義室を設けた。同年3月の学位記授与式と4月の入学式はこの大講義室で行われた。

また、翌年発足予定の大学院のための専用施設(大学院生研究室、演習室、講義室、コンピューターオープンルーム)も設置した。B棟の完成により、管理棟-講義棟A-講義棟B-体育館と、バランスのよい校舎配置となった。

教職課程の開設と取得資格の拡大

本学では、ハード面(設備環境)の充実にあわせてソ



新校舎のB棟

フト面（教育内容）においても学生に合わせた指導を展開し、一層の充実に努めた。平成14（2002）年、人間科学科について、教員養成にふさわしい教育課程等の改善を図り、教職課程として文部科学省の認定を受けた。養護教諭と中・高校教諭（保健体育・保健・福祉）の教員免許状が取得できるようになった。また、博物館学芸員の資格を取得できるようにカリキュラムを整備し、文部科学省の認定を受けた。博物館学芸員の資格は、人間科学科・人間環境学科の双方の学生が取得できる。

さらに、平成17年度より、精神保健福祉士の受験資格が得られるとともに、人間環境学科（18年度より人間環境情報学科）では高校教諭一種免許状（情報）が取得できるようになった。

愛知みずほ大学大学院設置

平成15（2003）年4月、大学院（人間科学研究科人間科学専攻）を設置した。1研究・1専攻の最小単位の大学院であるが、愛知みずほ大学の人間科学部を基礎とし、「人間科学」に関する豊かな知識と技術を身につけた高度の専門家、職業人を育成することを目的とする。また、養護教諭や健康福祉関係の教員、職業人や一般社



大学院校舎

会人に対して、組織的なりカレント教育などの生涯学習の機会を提供することによって社会に寄与することを趣旨とした。そのため、名古屋市瑞穂区にサテライトキャンパスを設け、昼夜間開講制、長期履修制度とし、社会人に対して広く門戸を開いた。入学定員は15人、標準修業年限は2年であるが、仕事を持ちながら3、4年をかけて修士の学位を取得する人も少なくなかった。さらに、愛知みずほ大学で取得可能な各教員免許状の種類についてその専修免許状を取得することができる体制を整えた。

教育の質保証

平成18（2006）年、戦後70年を経て教育基本法が初めて大きく改定され、教育改革が進んだ。「教える側」による一方向の講義スタイルから「教える側」と「教えられる側」双方向による進め方が、さらには「教えられる側」を重視する講義形態が推奨された。アクティブ・ラーニングと称する学習者を主体とする授業形態等への変化である。授業形態のみならず、学生へは当該大学・短期大学の建学の精神、教育理念、教育目標がシラバス等に明示され、目標を達成するための教育課程において、各授業科目が教育目標とどのような関係にあり、また、



大学院パンフレット



サテライトキャンパスでの授業

その授業内容は言うに及ばず、必要な予習・復習内容、そして学生自身が成果をどのように評価するのか等、すべてを網羅した講義計画の明示が必要となった。

本大学と本短期大学部においては学生による授業評価アンケートを踏まえ、毎年改善し続け、学生にとって活用度の高いシラバスを作成している。昭和の時代、シラバスにおける講義概要が300字程度であったことを振り返ると、その変化は画期的ともいえる。学習成果についても可視化され、個人の達成度のみならず、学科専攻コースや大学・短期大学部全体の評価が可能となった。

人間環境情報学科へと名称を変更

平成18(2006)年4月、人間環境学科は人間環境情報学科へと名称を変更した。かねて進めていた情報科学分野の強化による教育研究内容の充実を反映したものであり、前年の平成17年には、高等学校教諭一種免許状(情報)授与の文部科学大臣認定課程を開設していた。現代の生活に欠くことのできないコンピューター技術や特にその使い手として情報機器や情報そのものの扱い方の基本を正しく身につけるための講義や演習を強化し、付属施設として情報教育センターを設置した。これ

により、カリキュラムは、環境情報マネジメント領域、環境デザイン領域、生活文化領域の3分野となった。

第三者評価の認証取得

平成11(1999)年の大学設置基準および短期大学設置基準の改正により、自己点検・評価の実施とその結果の公表が義務付けられた。平成16年度から、すべての大学、短期大学、高等専門学校は、教育研究の質を担保するため7年以内ごとに文部科学大臣が認証した認証評価機関の評価を受けることが法律で義務づけられた。この時期は大学改革が叫ばれ、平成16年に国立大学は国立大学法人に移行した。

本学では、教職員の意識改革とともに着々と準備を進め、平成19年、第三者評価機関である公益財団法人日本高等教育評価機構の認証評価を受け、大学評価基準に適合していると認定された。高等教育機関としての役割向上を図るため定期的に自己評価を行い、平成26年度にも同機構の認証評価を受けた。

また、短期大学部も平成22年3月、一般財団法人短期大学基準協会より第三者評価の結果、適格と認定された。



人間環境情報学科時のパンフレット



豊田市教育委員会と連携調印

豊田市教育委員会と連携調印

平成21(2009)年3月3日、愛知みずほ大学は、豊田市教育委員会との連携に関して本学において調印式を行った。大学と豊田市立の小中学校が連携し、相互に学習効果を高められる活動を進めていくこととなった。具体的には、教師を目指す学生に対して豊田市教育委員会がセミナーを開催、小中学校に学生が出向き、児童・生徒の学習や部活動を支援する。また児童・生徒が大学の施設を利用して学習したり、大学の研究に協力したりする案も挙げられた。

短大の改革始動

機動力の原点「短大の今後を考える会」

平成16(2004)年度から導入される認証評価制度に対応すべく、短期大学部においては平成14年に「短大の今後を考える会」を立ち上げ、学内改革に取り組んだ。メンバーは各研究室の教授と事務局の職員で、計8人で活動した。一つひとつの課題に対しいつまでに成果を上げるか等の具体的な対応策を、一カ月に1件のペースで13

カ月間続け、着実に成果を上げていった。13カ月後、軌道に乗せた各対応策は、内容に応じて既存の各委員会に振り分けられ、「考える会」は発展的に解消された。「考える会」は短期大学部の意識改革の原点としても評価されるものであり、短期大学部において機動力・団結力が育ったのは、考える会の設置とその活動があったからこそである。

短期大学部の改編と充実

平成15(2003)年4月より、短期大学部は、ホームヘルパー養成の研修指定校となった。平成17年には、懸案であった栄養教諭二種免許状授与の所要資格に係る課程が認定を受け、栄養教諭二種免許状の取得が可能となった。栄養教諭とは、子どもたちに対して「食に関する指導」と「学校給食の管理」を一体的に行い、子どもたちが将来にわたって健康に過ごせるようにという考えに基づいて、同年4月から創設された制度である。現職の栄養職員に対しても、免許状取得に必要な単位修得のための現職教育を行っていった。また、同年には情報処理士・プレゼンテーション実務士資格教育指定校ともなった。

生活文化専攻
 子どもたちが生活を通じて健康・安全で活のある生活を送るため、健康意識の啓蒙を考える子どもの現代的な健康観への対応を学ぶ

栄養教諭コース
 子どもたちが生活を通じて健康・安全で活のある生活を送るため、健康意識の啓蒙を考える子どもの現代的な健康観への対応を学ぶ

オフィス総合コース
 パソコン講習や社会人基礎講習をはじめとする学習から、実社会で必要な幅広い教養・実務的な専門力を養う

食生活コース
 食生活に関する深い知識を身につけるとともに、健康科学と食生活に関する幅広い学び、健康志向で充実した生活づくりを学ぶ

生活文化専攻
 栄養教諭コース
 オフィス総合コース
 食生活コース

特別教室/キッズ保健室

03 社会に役立つ「栄養教諭」をめざして
 栄養 藤村 美穂子

04 社会に役立つ「オフィス総合」をめざして
 オフィス総合 藤村 美穂子

05 家業、地域、社会で活躍する「食生活」をめざして
 食生活 小長井 紀子

短大3コース編成となったパンフレット

短期大学部生活文化専攻では、平成2年以降、教育目的別にコースを編成し、内容について時代の要請に応じて適宜見直しを図ってきた。平成20年4月にも、生活文化専攻コースの再編成を行い、養護教諭コース、オフィス総合コース、食生活コースの3コース編成とした。

一方、昭和38（1963）年4月に設置した専攻科は、平成19年に廃止することとなった。平成20年10月には、介護保険事務士養成講座指定校となる。

瀬木学園第一次中期計画策定

人間科学部心身健康科学科に名称変更

平成23（2011）年4月、愛知みずほ大学人間科学部人間科学科を心身健康科学科に名称変更し、人間科学コースを新設した。激変する世界・社会情勢に的確に対応できる人材を育成するために、瀬木学園建学の精神である「健への教育」に基づく本学の基本的役割に立ち戻る必要があると考えてのことであった。いかなる職業に就こうとも、その使命を全うするうえで共通の基盤となる人間性を育み、心身の健康マインドを醸成することを重

視し、名称変更に至ったものである。また、同時に愛知みずほ大学大学院人間科学研究科人間科学専攻を心身健康科学専攻に名称変更した。

将来構想委員会と第一次中期計画

本学は、平成19（2007）年度からの数年間、学生募集の低迷が続いたことから、外部有識者を含む将来構想委員会を組織し、議論が重ねられた。学園の経営状況を分析・評価し、私立学校法の問題である永続的かつ健全な経営確保、すなわち部門ごとに経営の採算をとるために、平成22年12月、「学校法人瀬木学園経営改善計画」を取りまとめた。

これを踏まえて、第一次中期計画（平成23年より平成27年度までの5年間）を平成23年2月に策定した。この中期計画の主な内容は、愛知みずほ大学および同大学院について学生の確保を前提に、大学および短期大学部の施設整備を一体的に行い、過渡的に豊田と名古屋の2キャンパスを経て名古屋キャンパスを整備することであった。

また、新しい瀬木学園の情報を発信すべく、MIZUHO 瀬木学園だより」を発刊した。「MIZUHO」は、当初は5



人間科学コースを新設したパンフレット



「MIZUHO 瀬木学園だより」

月・7月・11月・2月の年4回発行したが、平成27年4月より年3回の発行に変更した。

2 キャンパス制の実施

「都市型キャンパス」の構想

平成14(2002)年、工場等の制限に関する法律が廃止され、郊外以外には新設できなかった大学等が都市部に設置できるようになった。また、大学設置基準の大綱化により、大学に必要な校地面積が大幅に縮小されることとなった。本学は、このような流れを利用して、平成23年度に愛知県みずほ大学短期大学部と愛知県みずほ大学瑞穂高等学校が位置する名古屋市瑞穂区春鼓町に大学・短大一体の「都市型キャンパス」を構想した。学校法人瀬木学園の平成23年度を初年度とする中期計画にのっとり、愛知県みずほ大学の再構築を目的としたものである。また、都市部への立地や機能拡充を行うことにより、学生の確保を図るとともに、社会人学生の確保、産学官の連携推進といった新たな大学機能の付加を図ることも狙った。



学生ホール

短期大学部校舎の改修

「都市型キャンパス」構想により、平成23(2011)年9月には、大学・短大の合同キャンパスの創設に向けて、短期大学部本校舎の解体に着手した。それに先立ち、高校の体育館のある短期大学部西校舎(2号館)をリニューアルし、短期大学部の教室や実習施設として使用することとなった。同年4月に耐震・改修工事が完了、短期大学部は同年度から主にこの校舎で講義と実習を行うこととなった。改修により、全体的に明るく開放的な雰囲気となった。特に学生ホールは、給茶機や自動販売機と電子レンジを備えており学生が集まるにぎやかな空間となったほか、トイレも広く、三面鏡を備えたパウダーコーナーやフィッティングルームもあり、使いやすいものとなった。

愛知県みずほ大学名古屋キャンパス開設

平成24(2012)年3月、高校に隣接する場所に愛知県みずほ大学名古屋キャンパスを開設した。名鉄本線の神宮前駅から徒歩約10分に立地し、アクセスも便利である。平成24年度と25年度は豊田キャンパスと名古屋キャンパスの両方で学生を募集し、2キャンパス制で授業を行うこととなった。新入生歓迎パーティーや合同クラブ活動な



女子トイレの洗面器コーナー



女子トイレのパウダーコーナー



女子トイレのフィッティングルーム

ど両キャンパスの学生の交流を通して、学生の一体感を醸成することに務めた。

平成24年4月1日、名古屋駅前の愛知県産業労働センター「ウイंकあいち」で入学式を行い、学部と大学院合わせて107人(学部生103人、大学院生4人)の新入生を迎えた。そのうち、学部生は豊田キャンパスに22人、名古屋キャンパスに81人入学した。

人間科学部人間環境情報学科においては、平成21年度より学生の募集を停止し、平成24年度に廃止した。



大学名古屋キャンパスの新校舎で飾った「MIZUHO 瀬木学園だより」



大学・短大合同新校舎

第7章 名古屋キャンパスに集結・新生みずほの誕生

大学・短大合同新校舎の竣工で 名古屋を拠点にして充実

平成25(2013)年



令和元(2019)年

平成25(2013)年、名古屋キャンパス1号館が竣工した。平成26年には大学が豊田市から全面移転し、瑞穂高校に隣接する都市型新キャンパスに短期大学部・大学・大学院が集結した。

高等学校においても大学と並行して施設の整備を進め、ハード面からも教育環境の充実を図り、弓道場・体育館の改修を行った。

平成30年、愛知みずほ大学短期大学部は愛知みずほ短期大学へ名称変更を行うとともに、幼稚園教諭二種免許状の取得が可能となる現代幼児教育学科を新たに設置した。

学校法人瀬木学園は、愛知みずほ大学瑞穂高等学校、愛知みずほ短期大学、愛知みずほ大学および愛知みずほ大学大学院の各学校が、相携えて建学の理想 に向かって歩み続けている。

大学・短大合同新校舎竣工

大学・短期大学部新校舎竣工

平成25(2013)年、短期大学部、大学、大学院の合同校舎として、名古屋キャンパス1号館が竣工し、4月より共同使用を開始した。新校舎は、講義室、実習施設としても充実した施設であるが、学生へのサービスにも重点を置き、都市型キャンパスにふさわしい構造と機能を備えたものとした。美しくすっきりとしたデザインの外観に、全館を通信エリアとする無線LANでノートパソコン、スマートフォン、タブレットなどが自由に活用できる環境を整備。さらに、快適な学生ラウンジやパウダールーム、心地良いオープンエアのウッドデッキなどを設置、総床面積の15.7%を学生のアメニティーのために供している。平成25年3月12日、1号館竣工セレモニーを挙行了した。

大学と短期大学部が校舎を共用することにあわせ、双方の事務局を一元化した。また、法人本部と高等学校の事務組織も整備するなど、事務組織の抜本的な改革を断行した。



学生ラウンジ

新カリキュラム実施、IRセンター稼働

平成25(2013)年3月、愛知みずほ大学と短期大学部との単位互換制度、瑞穂高校との連携教育協定を締結した。一方で新年度よりカリキュラムの改革とシラバスの充実を図った。従来の基礎科目と専門科目の2大区分を、デザイン講座(A科目)、未来をひらく基礎科目(B科目)、未来を創る実践力形成科目(C科目)、専門科目(D~G科目)、教職に関する科目(H科目)にコード化し、履修順次性を明示、4年間を通しての系統的履修計画を立てやすくした。

また、わが国でのIR(Institutional Research)導入が急速に進展してきていることを踏まえて、平成25年4月、愛知みずほ大学にインスティテューショナル・リサーチセンター(IRセンター)、10月に学習支援センターを設置した。大学の質を保証する中心的役割を担い、教育活動の充実・発展に寄与することを目的として、学生に対するアンケート調査を組織的に実施するほか、本学の教育および学生支援に関する諸データの統合的分析と情報提供の助言などを行う。

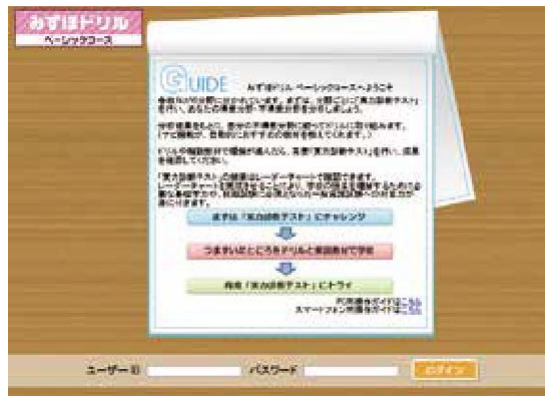
また、同時期に「学修コンシェルジュ制度」も発足。教務的知識や学生の悩み解決などの支援方法を身につ



学修コンシェルジュ制度



ウッドデッキ



みずほドリル

けた学修コンシェルジュがサポートを行う。また、学修コンシェルジュの活動をより充実させるために、情報通信技術（ICT）を活用した学習支援環境を整備した。ウェブ学習システム「みずほドリル」を開発、平成28年12月から大学と短期大学部で一部の運用を開始し、翌年4月にはすべての学生の利用が可能となったほか、授業にも導入された。

愛知みずほ大学・名古屋キャンパスに全面移転

豊田キャンパスからの完全移転は、当初は平成26（2014）年度末までとしていたが、平成24・25年度の豊田キャンパスの学生確保の状況や教学、学生生活上の問題、過大な施設に係る経営上の問題などを考慮し、1年早めて平成25年度末に移転を完了することとした。そのため、豊田キャンパスにおける平成26年度募集を停止し、在学生においては、保護者とともに理解と協力を呼びかけた。

なお、平成24・25年度の入学者数が定員を超過したことに加え、都市型キャンパスである新校舎完成による学生増が見込まれたため、平成26年度募集より入学定員を130人に増員した。

平成26年4月、愛知みずほ大学は、2キャンパス制に終止符を打ち、名古屋市内に全面移転した。名古屋キャンパス設置構想からわずか3年で実現したことになる。瑞穂区春敲町の瑞穂高校に隣接する都市型新キャンパスに大学・短期大学部・大学院が集結、学園に新たな変化と改革の息吹が芽生えた。1号館は、大学生4学年と短期大学部生2学年が共に学習する場となり、終日活気に満ちている。

豊田キャンパス（愛知県豊田市平戸橋町）は、平成25年度をもって閉鎖した。跡地については、施設等整備計画推進委員会の「住宅開発を前提に売却することが最も適している」との答申を受け、それに向けて学内での諸手続きを進め、さらには豊田市と協議を重ねた結果、トヨタホーム株式会社へ売却した。

大学・短大の改革と充実

短期大学部・大学の社会貢献への取り組み

短期大学部が定員100%以上を維持しているのは、教職員の努力による。その努力の一つが、教職員が一丸



平成27年、大学がJIHEEより正式に認定された

となって長年にわたり継続している地域貢献事業である。高等学校家庭科の教員を対象とする「食品加工講習」は、現在のように地域貢献が叫ばれる以前の昭和44(1969)年度を1回目として第29回まで毎年実施、中断を挟み平成22(2010)年度より再開し通算38回の実績を誇る。

また、社会貢献として、地域の高齢者を対象に建学精神の周知を目的に、「みずほヘルスセミナー」を平成27年度から年に4回ずつ開催、定着してきている。地域貢献と学生の教育という両面を意識した「みずほげんキッズ」は平成26年度から年2回定期的に開催している。その他名古屋市との連携講座も含め、それぞれ対象や目的は異なるが、どれも「健康」を共通の基軸とした地域貢献事業である。

大学における健康カレッジ「健康へのいざない」は名古屋市健康福祉局健康増進課の数校への呼びかけにより実現した連携講座であり、年間全7回開講。運動、栄養、心理面からのアプローチによる「健康」をテーマに、平成29年度から毎年、実施している。

大学ポートレートの公表と建学の精神

平成16(2004)年4月に学校教育法が改正され、自己点検・評価の公表が法律により規定された。平成19年6月には教育研究活動の状況を公表することが規定され、平成23年4月から施行されることとなった。本学では平成24年「大学ポートレート準備委員会 ワーキンググループ」が設置され、平成27年からウェブ上で「大学ポートレート」の運用が開始された。

この時期、私学の特徴として「建学の精神」による独自性が求められる機会が頻繁となり、大学ポートレートは最たるものであった。このころまでの短期大学の「建学の精神」は、開設当初より内容においては一貫していたものの、表現においては歴代理事長・学長によって異なることが判明。大学ポートレートをはじめ、さまざまな場面における今後のことを考え、基礎事項検討委員会(瀬木理事長、砂賀法人事務局長、大塚短期大学部学長、稲垣短期大学部准教授、杉山短期大学部講師)を設置し「建学の精神」の表現の統一を検討、「保健衛生の学びを基に科学的思考のできる女性の育成」と決定された。



食品加工講習



みずほげんキッズ



みずほヘルスセミナー



健康カレッジ「健康へのいざない」

近畿大学弘徳学園と教育連携

大学は平成25（2013）年10月、学校法人近畿大学弘徳学園（現・学校法人弘徳学園）との間で進めてきた連携交渉が合意に至り、同法人が運営する近大姫路大学（通信制）と協定を締結した。この教育連携制度により、小学校教諭一種免許状の取得が可能となり、キャリアアップの道が広がった。

短期大学部においても、近畿大学豊岡短期大学と教育提携の協定を締結。平成26年設置の子ども生活専攻において、保育士資格のほかに幼稚園教諭二種免許状を取得することができるようになった。

文科省の補助金事業採択決定

平成25（2013）年度、私学助成の改善とさらなる充実を図り、私立大学の質の促進や向上を目指して、文部科学省の「私立大学等改革総合支援事業」がスタートした。本学は、そのうちの「大学教育の質的転換」に申請を行い、平成25年11月に採択された。全国で492校が申請したが、採択されたのは192校のみであった。

「教育の質的転換」とは、全学的な体制での教育の質的転換を支援するもので、本学の場合、教育課程の見直

しやシラバスの様式改善、大学改革を推進する学長裁量経費を設けるなどの総合的な改革が評価されたものである。

健康運動指導士養成認定校に

平成26（2014）年、人間科学部心身健康科学科は健康運動指導士養成認定校となった。健康運動指導士とは、保健医療関係者と連携しつつ安全で効果的な運動を実施するための運動プログラム作成や実践指導計画の調整などを行う役割を担う。健康長寿社会となった日本において、活躍が期待されている有望な資格である。「健への探究」をカレッジモットーとしている本学では、従来、健康運動実践指導者の養成を行ってきたが、新カリキュラムの整備により、より大きな活躍が期待できる健康運動指導士の認定申請を行ったものである。

国際交流プロジェクトをスタート

急激に進むグローバル化を受け、本学でも国際交流プロジェクトがスタートした。学内に「国際交流ラウンジ」を設置、海外留学に関する情報や外国語書籍をいつでも気軽に閲覧できるほか、TOEICの勉強会も開催する。



ボンド大学附属語学学校との協定覚書の取り交わし



また、コミュニケーションスキルとしての英語習得と異文化理解を目的とした短期留学を行うために、海外の大学と協定を締結。アメリカのハワイ大学マノア校、カリフォルニア大学リバーサイド校、オーストラリアのクイーンズランド州ボンド大学附属語学学校と協定覚書を取り交わし、平成26(2014)年度から短期留学(研修)を実施した。

短期大学部・子ども生活専攻開設

大学改革の一環として、平成26(2014)年4月、短期大学部生活学科に子ども生活専攻を設置し、1期生35人を迎えた。保育士養成施設の指定を受け、充実した実習・演習授業で基礎力を高めるカリキュラムとし、保育実習室やダンス室、音楽室などの設備も充実させた。大学との共用による利点を活かし、充実した教育の場を提供するとともに、さらなる社会貢献を目指した。

子ども生活専攻の設置により、生活学科は、子ども生活専攻・食物栄養専攻・生活文化専攻の3専攻となった。また、同年4月より、生活文化専攻を3コースから2コース(養護教諭コース・オフィス総合コース)へ改編した。



4号館養護実習モデルルーム・研究室



5号館トレーニングルーム

名古屋キャンパス設置計画完了へ

平成26(2014)年4月に名古屋キャンパスに全面移転したのちも、名古屋キャンパス設置計画に基づいて施設整備が進められた。3号館は、改修のうえ研究棟として新たにオープンした。さらに4号館に養護実習モデルルーム・研究室、5号館にはトレーニングルームを整備し都市型キャンパスが完成した。

瀬木学園体育館完成

平成27(2015)年3月、1号館からおよそ300mのところへ瀬木学園体育館が完成した。鉄筋コンクリート造り平屋建て、総面積は約1,000㎡で、バスケットボールコート1面、バレーボールコート1面、バドミントンコート3面のスペース(同時利用は不可)を有し、柔道・剣道にも対応できる。高校の授業から大学の部活・サークル活動まで学園全体で幅広く活用する。近隣に対する配慮として、二重ガラスを採用した防音対応の構造とした。また、音漏れ対策と使用時の快適性を兼ねて、冷暖房を完備した。

体育館建設地にあったテニスコートの代替として、瑞穂区上山町にテニスコートを新設、平成25年12月に完成した。人工芝2面を配し、更衣室やトイレのある付属



瀬木学園体育館



テニスコート

建物を建設、近隣住民に配慮し周囲に高さ6mのネットを張り巡らせた。

FSD推進委員会発足

大学設置基準の一部改正により、平成29（2017）年4月1日からSD（スタッフ・ディベロップメント）が義務化されることとなった。社会のあらゆる分野が急速に変化するなかで、すべての大学に、職員が大学等の運営に必要な知識・技能を身につけ、能力・資質を向上させるための研修の機会を設けることなどが求められる。大学がその使命を十全に果たすためには、運営についても一層の高度化を図ることが必要であった。

さらに平成29年10月、大学設置基準の一部改正により、FD（ファカルティ・ディベロップメント）活動が義務化された。FDとは、教員の教育能力を高めるための実践的方法のことであり、大学の授業改革のための組織的な取り組みを指す。具体的には、学生による授業評価アンケートの実施、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催など広範囲にわたる。

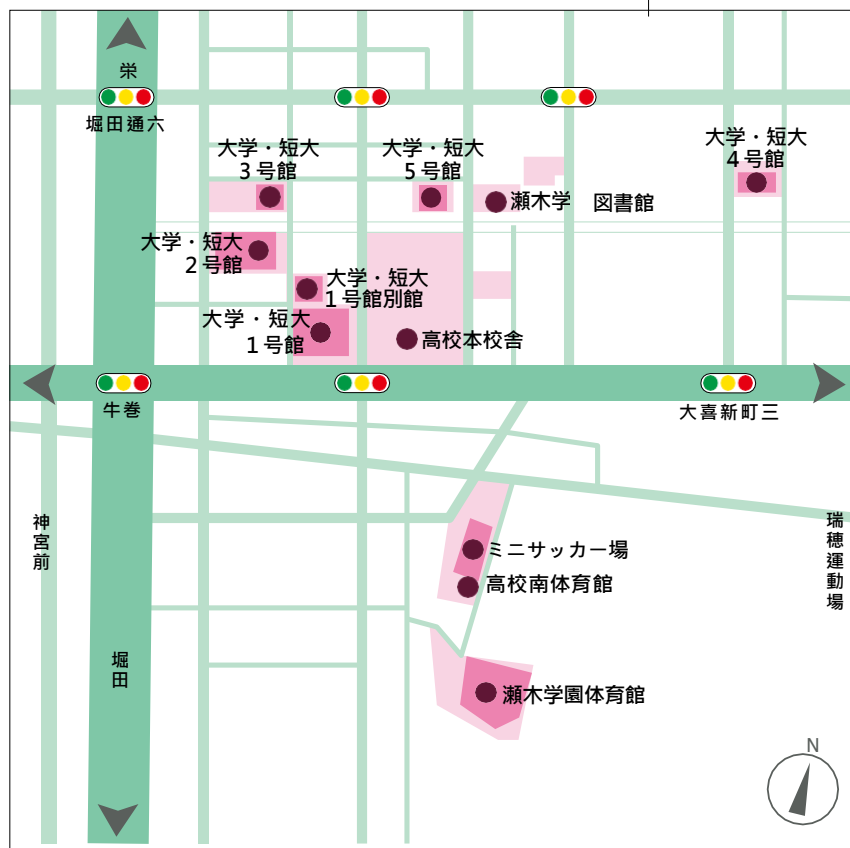
本学では、平成17年度から「FD サロン」を開催するな

ど、早くから取り組みを進めていた。平成27年4月、本学の教育理念の実現に向け、SD・FDを積極的に推進するために、FSD推進委員会が発足した。

私立大学等改革総合支援事業

戦後の団塊世代と第2次ベビーブームにより急増した大学受験生の受け入れは私立大学・短期大学が担っていた。その後迎えた少子超高齢の時代にあたっては、平成28（2016）年5月「私立大学等の振興に関する検討会議」の設置、平成29年5月「学校法人制度改善検討小委員会」の設置によって教育の充実、ガバナンスの在り方、私大の自主的な改革の必要性等が議論され、私立大学・短期大学にとって厳しい時代となった。平成31年からの私学法や学校教育法、設置基準等の改正が決定したことを受け、また定員割れ等の要因により、私学によっては学校法人から公立大学法人へ設置者変更、あるいは統合を余儀なくされる私立大学が生じる（平成20～平成27年度にかけて14校が統合して6校に）など、私学への逆風は強まる一方となった。

文部科学省の私学への補助金についても、学生1人当たりの補助金に在籍学生数を乗じるといった画一的な



校舎配置図

第7章 名古屋キャンパスに集結、新生みずほの誕生

配分ではなく、定員充足率に応じたメリハリのある補助金配分へと移行することとなった。メリハリ配分の根拠となるのは私立大学等改革総合支援事業である。教育改革や教育活動に積極的に取り組み努力している私立大学等を支援する事業として、平成25年度から開始された。平成30年度のテーマは下記のとおりである。

- タイプ1：教育の質的転換
- タイプ2：産業界との連携
- タイプ3：他大学等との広域・分野連携
- タイプ4：グローバル化
- タイプ5：プラットフォーム形成

取り組みの充実度は点数化され、当該年度の基準得点との相関によって、支援事業の選定の可否が決定される。

本大学・短期大学部は教育改革に努め、そろってタイプ1に申請した結果、本大学・短期大学部とも3年連続して採択された。

定員充足100%を維持

定員充足率は私立大学等改革総合支援事業の評価に大きく反映される。全国私立大学の約4割が、また全国

短期大学の約7割が入学定員未充足という状況下において、本大学・短期大学部がそろって充足させていることは、教職員の不断の努力によるものである。

短期大学部においては、18歳人口減に加えて女子の四年制大学志向により短期大学志望者が全志願者の4%を割る現状においての結果であり、善戦しているといえよう。こうした取り組みは補助金の獲得という利点もさることながら、「教育の質的転換」における教職員の真摯しんしんな取り組みに対する評価として大変意義深いものである。

学園運営に組織の充実

新理事長就任

学園の理事長は平成9(1997)年より18年間にわたって瀬木和子が務め、学園の進展に尽力した。その後、平成27年6月1日付で大塚知津子工学博士が新理事長に就任した。大塚理事長は、名古屋大学工学研究科博士課程満了、分析化学の専門家である。平成9年度から平成26年度まで瀬木学園図書館長を務め、この間、私立短期大学図書館協議会の東海・北陸地区会長館および

私立大学等改革総合支援事業 選定状況

	大学			短大			高専		申請校数計	選定校数計	選定率	得点(点)	
	申請校数(校)	選定校数(校)	選定率	申請校数(校)	選定校数(校)	選定率	申請校数(校)	選定校数(校)				満点	選定点(満)
タイプ1 【特色ある教育の展開】	397 (420)	131 (142)	33% (34%)	184 (200)	47 (64)	26% (32%)	2 (2)	0 (1)	583 (622)	178 (207)	31% (33%)	89 (84)	48 (55)
タイプ2 【特色ある高度な研究の展開】	67	39	58%	7	1	14%	0	0	74	40	54%	58	22
タイプ3 【地域社会への貢献】 地域連携型	180	47	26%	54	8	15%	0	0	234	55	24%	54	30
プラットフォーム型 ※1(平成30年度タイプ0 「プラットフォーム形成」)	144 (178)	102 (100)	71% (56%)	50 (69)	29 (34)	58% (49%)	1 (0)	0 (0)	195 (247)	131 (134)	67% (54%)	共通78* 個別50 —	共通48 個別17 —
タイプ4 【社会実装の推進】 ※1(平成30年度タイプ2 「産業界との連携」)	89 (100)	51 (47)	57% (47%)	10 (16)	1 (2)	10% (13%)	0 (1)	0 (0)	99 (117)	52 (49)	53% (42%)	60* (52)	26 (24)
延べ数	877 (939)	370 (394)	42% (42%)	305 (312)	86 (105)	28% (34%)	3 (3)	0 (1)	1,185 (1,254)	456 (500)	38% (40%)	— —	— —
実数計	447 (457)	242 (260)	54% (57%)	203 (212)	68 (85)	33% (40%)	2 (2)	0 (1)	652 (671)	310 (346)	48% (52%)	— —	— —

注：()内は昨年度(30年度) ※タイプ3プラットフォーム型共通設問及びタイプ4の満点は選定時加算項目を含む。

令和元年 私立大学等改革総合支援事業の選定状況

び幹事館としてのべ6年間携わった。短期大学部学長も兼任するほか、授業も担当する。大塚理事長は、時代に即応すべく愛知みずほ大学と同短期大学部、同瑞穂高校の協働・共存に努め、毎週木曜日に法人定例会を開催し学園の課題の把握に努める一方、学園内における意思決定機関として学園運営会議を発足させた。

合同委員会の設置

平成26（2014）年、大学が名古屋へ全面移転した後、学園の設置する高等学校、短期大学部、大学による合同委員会の設置が可能となった。この委員会を通して学園内における情報共有の結果、意思疎通が深まったことは瀬木学園の特徴として特筆すべきことである。

教学において責任ある三者による会合の機会であり、高大連携委員会の第1号として平成27年に学園教学会議（両学長と校長）が設置された。以来、十分な機能を果たしてきた。他の合同委員会は平成29年からスタート、目的に応じて名称変更や新たな委員会設置を行い、それぞれ順調に機能、活発化している。

内部監査室の設置

文部科学省が設置した「私立大学等の振興に関する検討会議」（平成28年）、「学校法人制度改善検討小委員会」（平成29年）は、平成16（2004）年の私立学校法（私学法）の改正による実質化が進んでいないと指摘、これを受けて令和元（2019）年、私学法および学校教育法が改正され、令和2年4月に施行された。学校法人を基盤とする私学に、公共性・公益性の観点から自主自立を尊重するガバナンスの見直しが求められ、ガバナンス・コードを令和元年度中に策定することとなった。

本学園においてはガバナンス・コードの「監事に関する決め事」は、平成28年に「瀬木学園内部監査規程」「瀬木学園内部監査実施要領」「瀬木学園内部監査室設置要領」を定め監事の教学監査の支援体制を整え、平成30年には「監事の選任に関する規程」を策定した。その他の内容については、令和元年度中に私学法の改正に伴う寄附行為の見直しとガバナンス・コードの策定を進めていくこととした。

学園内連携委員会

学園の記念誌（『瑞穂短期大学四十年史』と『瑞穂高



大塚知津子理事長



高校・短期大学部における連携教育協定書

等学校創立五十周年記念誌』：平成2 年刊) が完成してからの30 年間における学園としての最大の特徴は、平成5 (1993) 年に豊田市に開学した愛知みずほ大学が平成26 年度には名古屋市へ全面移転し、学校法人瀬木学園における3 組織である高等学校、短期大学部、大学が春敲町に集結したことである。移転直後の大学は豊田での恵まれた環境下における校舎、体育館等の施設設備等から脱却することに努め、新天地に新構想を展開し実現するまでに4～5 年を要した。

■ 大学・短大合同委員会 ■ 大学・短大高校合同委員会

- ・ 大学及び短大教職センター
- ・ 研究倫理審査委員会
- ・ 大・短間連絡調整委員会
- ・ 大学・短大防災委員会
- ・ 大学・短大国際交流委員会
- ・ 大学・短大図書委員会
- ・ 大学入試センター担当委員会
- ・ 瀬木学園紀要委員会
- ・ 瀬木学園内部監査委員会
- ・ 賞罰委員会
- ・ ハラスメント委員会
- ・ 80周年記念誌プロジェクト
- ・ 地域貢献活動委員会
- ・ キャリアセンター
- ・ 中期計画充実委員会
- ・ 高大連携委員会
- ・ 瀬木学園図書館運営委員会
- ・ 瀬木学園合同図書委員会

平成29 年度に設置した高等学校・短期大学部・大学の教職員からなる合同委員会も少しずつ議論が深まり、機能も高まって軌道に乗りつつある。令和元 (2019) 年度の大学・短大合同委員会および大学・短大・高校合同委員会を下記に示す。

瑞穂区と包括連携協定

平成30 (2018) 年6月27日、学園 (愛知みずほ大学・愛知みずほ大学短期大学部・愛知みずほ大学瑞穂高等学校) は、所在する名古屋市瑞穂区と、包括連携協定を結ぶ調印式を行った。瑞穂区とは従来さまざまな取り組みを通じて交流を図ってきたが、今後はさらなる連携のもと、教育研究の充実・学生の実践力の養成、魅力ある地域の形成や発展を目的に、互いの貢献を誓った。学校名に「みずほ」の名を冠する教育機関として今後さらなる地域への貢献を実現していく。

「健」を基軸とした教育を社会に還元

教育機関としての本来の意義は、生徒・学生の教育において、それぞれの教育目標を実現することにある。本学園の高等学校においては「健への志」、短期大学部に



瑞穂区と包括連携協定を結ぶ調印式



瑞穂区民祭り

においては「健への教育」、大学にあっては「健への探究」をモットーとして、「健」を基軸とした教育を一貫している。高等学校・短期大学部・大学の3組織を擁する本学園は、地域の知的拠点として、3校の教育・研究成果を地域に還元、共有して地域・社会に資することが求められている。高齢社会である現代で、「健」の教育成果を地域・社会へ積極的に発信し還元していくことで地域における人々と社会の健全な営みに役立つよう努めていく。

瀬木学園アクション・プランと第二次中期計画の策定

瀬木学園アクション・プラン

高等教育機関は、少子高齢化による18歳人口の減少と急激なグローバル化への迅速な対応が求められつつある。この難局に対し、力点を置くべき教育の優先順位を決定し、学園の進むべき方向性等を示す基本姿勢となる瀬木学園アクション・プランを、学園運営会議での合意により平成28(2016)年2月に策定した。

瀬木学園においては高等学校、短期大学部、大学お



愛知中小企業家同友会系の産学地域連携に関する基本協定締結

よび大学院の教職員が意識を共有しつつ、共同で基本計画に取り組み、常に教学面および経営面の改革を目指し、学園の持続的発展に努めていく。

第二次中期計画策定

平成28(2016)年3月の理事会において、教職課程の再課程認定と幼稚園教諭二種免許状授与資格の申請等、教学を主体とする5年間の第二次中期計画(平成28年度から令和2年度)が承認された。瀬木学園アクション・プランを踏まえ、平成29年3月に教学改革を主軸とする第二次中期計画を策定した。

同計画では、教職センターの設置、大学の充実、短期大学部の幼稚園教諭免許取得に向けた現代幼児教育学科の開設。入試センターを設置し入試改革に取り組むことや教職員評価の実施、人事改革に伴う関連規定の整備、教職員を対象としたFSD活動の推進のほか耐震化など設備の充実にも取り組む。

第二次中期計画の中間年となる平成30年度には中期計画充実委員会しんちよくを設置、同計画の進捗状況の確認、終了年次までの推進方策について議論し、あわせて第三次計画へとつなげるための議論を進めている。



学内企業説明会

愛知中小企業家同友会との産学連携協定締結

平成28(2016)年3月14日、本学は愛知中小企業家同友会と産学地域連携に関する基本協定を締結した。愛知県では名古屋市立大学などに続き、本学で4校目となるが、短期大学としては唯一となる。愛知中小企業家同友会には4,000以上もの会社が協力企業として参加しており、地元を支えている中小企業と連携することで、インターンシップ先の確保も可能となった。また、平成29年10月には、本学で学内企業説明会を開催し、同友会会員企業が出展、経営者自らが自社の魅力を語り、仕事内容を丁寧に説明した。

企業の公式マスコットをデザイン

愛知県は、愛知ブランド企業のPRや製造業に対する理解を深め、職業観の形成や就職活動を支援する目的で出前講座「愛知ブランド企業に学ぶものづくり」を実施している。平成28(2016)年6月には、あおさ関連企業の宮川産業株式会社を招いて、短期大学部の学生たちがあおさを使用したレシピやPRマスコットの作成に取り組んだ。この講座後、宮川産業では食物専攻の1年生が考案したデザインを基に社内検討会を重ね、同社の



あおさ小僧



屋上に設置したソーラー発電システム

公式マスコット「あおさ小僧」が誕生した。

高等学校の改革と生徒の活躍

「エコ」と「デジタル」で最新の教育環境を整備

大学と並行して高等学校の施設の整備を進め、ハード面からも教育環境の充実を図った。平成26(2014)年には普通教室の視聴覚システム、スタジオの放送システム、視聴覚教室のリニューアルなどによりデジタル化を進めた。また、それに先立って、本校舎屋上には使用電力の一部を賄うソーラー発電のシステムも設置した。時代のキーワードである「エコ」と「デジタル」で最新の教育環境を整備、生徒の教育支援を強化した。

高大連携「夏期集中講座」実施

学園の高大連携の一環として、平成26(2014)年、夏休みを利用した「夏期集中講座」を実施した。高校在学中に大学や短期大学部の授業の履修と単位の修得ができるというプログラムである。同年は「英語コミュニケーション」など五つの講座を用意し、瑞穂高校の生徒24人



弓道場



東体育館

が受講した。

弓道場・東体育館・西体育館改修工事

平成28(2016)年、耐震補強を目的に、高等学校の弓道場と東体育館の改修工事を行い、両施設は、より快適で安全な施設に生まれ変わった。弓道場の改修は6月から8月にかけて行われ、ほぼ全面的な改修となった。また、東体育館は天井を中心として改修を行い、天井の照明をLEDに取り換えたため、見違えるほど明るくなった。翌年には西体育館も改修工事を行った。

活躍する高校の部活

高等学校においては、多様な気質・能力を持つ生徒それぞれに、丁寧かつ最適な教育・指導を行う。生徒本来の能力を最大限伸ばす教育の成果は、32部を有する部活動にも表れている。特に水泳・卓球・スケート・珠算等は毎年着実に成果を上げ、好成績を残している。

水泳部6年連続インターハイ入賞

平成20(2008)年は、水泳部の2年生が本校で初めてインターハイでの入賞(個人メドレーリレー)を果たした。



インターハイ出場を果たした卓球部



インターハイで優勝したスケート部の本郷理華選手(中央)

平成21年も同種目において連続入賞したが、さらに平成22年には2種目においてインターハイ入賞という快挙を成し遂げた。さらに活躍は続き、平成25年にはインターハイ出場記録を14年連続に伸ばすとともに6年連続入賞を果たした。同年の7つの入賞は過去最高の成績であった。

卓球部は2年連続で表彰台に

卓球部はインターハイの常連校であったが、表彰台にはなかなか届かなかった。平成24(2012)年、長野市真島総合スポーツセンターで行われたインターハイ女子学校対抗戦(団体戦)において3位となり、初めて表彰台に立った。女子ダブルス戦においても5位に入賞した。翌年にも3位に入賞、2年連続での表彰台に上った。

その後、平成29年にも女子学校対抗戦3位入賞を果たしたほか、女子シングルスでも銅メダルを獲得している。そして、平成30年の女子シングルスでは3年の野村萌選手が念願の優勝を果たした。

世界に羽ばたいたスケート部の活躍

平成25(2013)年1月、第62回全国高等学校スケート競技選手権大会(インターハイ)において、当時1年生



全国大会で1位となった男子スケート部



インターハイで優勝した卓球部の野村萌選手



インターハイで優勝したスケート部の山本草太選手

だった本郷理華選手が優勝した。国体でも個人優勝を果たしており、高校2冠に輝いた。高校スケート部は、平成24年に創部したばかりであったが、平成26年1月の第63回全国高等学校スケート競技選手権大会では、本郷選手が前年度に続き女子個人で連覇を果たした。学校対抗（団体）においても男女が共に準優勝という好成績を取めた。さらに本郷選手は3年生のときにグランプリシリーズに参戦してスケートカナダで5位、ロシア大会で初優勝するなどの活躍を見せ、この年のグランプリファイナルに日本女子選手として唯一出場した。全日本フィギュアスケート選手権大会では、銀メダルを獲得し世界フィギュアスケート選手権大会の出場を決め、学園全体を盛り上げた。

平成28年1月、第65回全国高等学校スケート競技選手権大会で1年生の山本草太選手が男子個人で優勝した。また、第2回リレハンメルユースオリンピックに出場して優勝、ジュニア世界一となる快挙を達成した。順風満帆に見えた矢先、3月に出場予定だった世界ジュニアフィギュアスケート選手権大会出発当日の朝、練習中に転倒し右足首を骨折した。懸命のリハビリを乗り越え、3年生の9月に、患部に3本のボルトが入っている状態で

競技に復帰した。平成30年1月の第67回全国高等学校スケート競技選手権大会では学校対抗で悲願の日本一、男子団体優勝に大きく貢献した。

スケート部のインターハイ学校対抗の成績は、男子は優勝1回、準優勝3回、4位1回、女子は準優勝4回、4位3回、5位1回。女子は平成25年1月のインターハイから連続入賞している。

スケート部は創部以来めざましい活躍を続けており、これからも全国、世界での活躍が期待される。

珠算部も実力を発揮

瑞穂高校の珠算部も活躍を続け、愛知県代表として20年連続で全国大会に出場するほどの実力を有している。平成28(2016)年8月に東京武道館で行われた第63回全国高等学校珠算・電卓競技大会では、3年生が種目別競技の読上暗算競技で3位に入賞、個人総合と伝票算競技でも佳良となる好成績を挙げた。



全国大会で好成績を挙げた珠算部



第2保育演習室



第一保育演習室



保育実習棟

愛知みずほ短期大学に改称

現代幼児教育学科の新設

短期大学の新しい魅力創造を模索するなか、待機児童問題から認定子ども園が新鮮な概念として広まりつつあった。認定こども園で勤務するには幼稚園教諭免許が必要だが、本短期大学部は、保育士の資格は取得できるが、幼稚園教諭二種免許の取得希望者は、本学が提携した大学の通信制度に頼っていた。両資格を学園内で取得できるようにすれば建学精神のもとでの一貫した教育が可能となることから、幼稚園教諭二種免許授与資格のための教職課程「現代幼児教育学科」の設置認可を申請した。

平成29(2017)年8月、文部科学省より「現代幼児教育学科」の平成30年4月の設置と幼稚園教諭二種免許状授与の所要資格に係る課程が認定された。これにより、平成30年4月に入学し保育・幼稚園教諭分野を目指す学生については、従来の「子ども生活専攻」に代えて「現代幼児教育学科」の志願者として募集を行った。現代幼児教育学科は入学定員50人、生活学科70人と合わせて

定員120人に改正となった。

「保育士&幼稚園教諭」という資格を得ることは、女性の就業支援と女性の自立につながり、本短期大学部の原点「女子教育&女子の自立支援」が充実することとなった。

愛知みずほ短期大学に改称

平成30(2018)年4月、現代幼児教育学科を新設し、学科が2学科となることを機に、「愛知みずほ大学短期大学部」を「愛知みずほ短期大学」と改称した(平成29年12月に文部科学省認可済み)。

瀬木学園は、愛知みずほ大学大学院・愛知みずほ大学・愛知みずほ短期大学および愛知みずほ大学瑞穂高等学校を擁し、より一層特色ある教育を推進、各学校が相携えて建学の理想に向かって歩み続けていく。

教育訓練給付制度の活用で社会人の受け入れ

現在、本短期大学が定員を充足できているとはいえ18歳人口の減少と女子の四年制大学志向(短期大学志望者が平成30年度においては4%を割る事態)を考えると、今後の募集の厳しさは避けられない。本学園の原点

社会人の方
保育士
栄養士
 の
国家資格取得を
目指したい方へ

最大112万円+αの教育訓練給付金が学び直しをサポート!!

対象
 ・食物栄養専攻(栄養士養成課程)
 ・現代幼児教育学科(保育士養成課程)

教育訓練給付金とは?
 教育訓練給付金は、厚生労働省が定める一定の訓練を受講する費用の一部が戻ってくる制度です。働く方の身体的な能力開発の促進又は非正規的なキャリア形成を支援し、雇用の安定と再就職の促進を図ることを目的とし、教育訓練受講に支出した費用の一部が支給されるものです。

給付金制度、私のケースもあてはまる?

- 再就職** 退職・育児で仕事を辞めたが再就職して復帰したい方
- 再就職** 得意なこと、興味のある分野で専門職に就きたい方
- 再就職** 国家資格を取得し転職でステップアップしたい方
- 再就職** 仕事を辞めて資格を取って再就職したい方

愛知みずほ短期大学で給付制度指定講座が始まります!

保育士・栄養士養成課程受講中	資格取得後、3年以内(雇用保険の被保険者として雇用された場合)	教育訓練給付金として給付金額の現金額から差し引かれた基本手当の金額 × 80%
80万円	32万円	73万円!

AMJC 愛知みずほ短期大学 2020年度新入生募集 募集定員から約16分!

教育訓練講座告知チラシ

AMJC 愛知みずほ短期大学
 食物栄養専攻 食品衛生科 栄養教諭科 幼児教育科 現代幼児教育学科

2020 社会人入試案内
 - 入試案内【付録】 -

さあ、学びの場へ。

短大の社会人向け入学案内

である「女子教育」と「女子の自立支援」を基盤に、今後の在り方の一つとして、女子の社会復帰支援に改めて取り組むこととした。

平成30（2018）年、単年度で必ず結論を出すことを目的に設置したプロジェクト・チームにおいて、4つの課題の一つとして検討された。まずは平成30年、教育訓練給付制度*の中長期的なキャリア形成を支援する「専門実践教育訓練給付金」制度を活用できる教育訓練講座を開講、学ぶ環境を整えた。この制度について本学園の全卒業生に向けて情報を発信し、あわせて履修登録制度の規定を定め、新たに資格取得を希望する女性を支援することとした。

平成31年、社会復帰を願っても自信を持ってないでいる既資格所有者の背中を押す支援事業として履修証明プログラム等を検討。今後はこうした支援を求める女性へのメッセージを、いかにして届けるかが課題となっている。

* 教育訓練給付制度：一定の条件を満たす雇用保険の一般被保険者等（在職者）または一般被保険者等であった離職者が、厚生労働大臣の指定を受けた教育訓練講座を自己負担で受講したときに、教育訓練にかかった経費（入学金や受講料など）の一部について、ハローワークから給付金の支給を受けられる制度。